

# 地歴の部屋 2025



# もくじ

パレオロゴス朝ルネサンスの影響とその特異性について 79 回生 主藤 慧悟

大内義隆の生涯 ～武家としても最盛期、公家としても最盛期、されど戦国三大愚人～  
81 回生 丸山 遥輝

コンゴ民主共和国の歴史と動乱 79 回生 重永 真拓

関東～関西間の交通の難所 79 回生 小西 權世

秋田の祖父の実家の歴史について 82 回生 石橋 豊

日本海軍・陸上戦闘機の発達について 81 回生 大越 智悠

和氣清麻呂に関する伝説について 80 回生 田中 康太郎

先史時代から神聖ローマ帝国成立までのドイツの歴史 81 回生 島根 瑞生

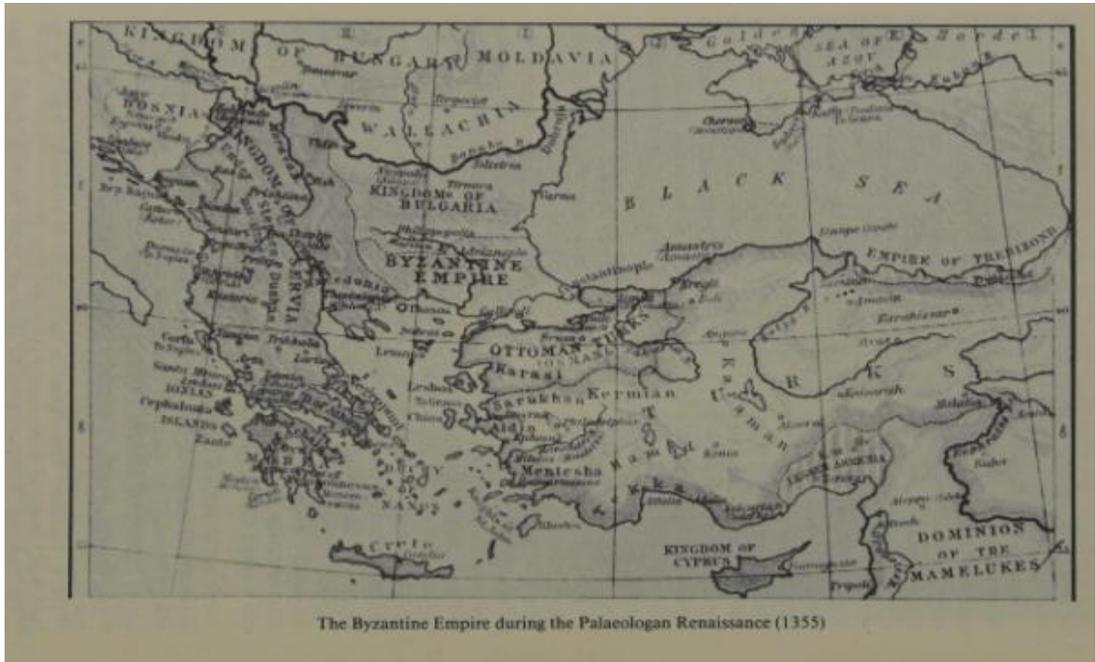
日露戦争から軍縮条約期における日本海軍の戦争計画 79 回生 田中 孝和

黒田官兵衛はなぜ天下を取れなかったのか？ 81 回生 前田 瑛介

# パレオロゴス朝ルネサンスの影響とその特異性について

## I、歴史的背景について

十世紀にはマケドニア王朝のもとでビザンツ帝国（以下ビザンツと呼称）はバシレイオス二世の時代に最盛期を迎えたが、後十二世紀のアンゲロス朝の統治下においてアセンおよびペータールの蜂起によりブルガリアを失い、同時期にセルビア地方にセルビア王国が起り、ビザンツより離れた。このように十二世紀において既に帝国は衰退の兆しを見せていたが、それは1204年の十字軍勢力によるコンスタンティノーブル陥落およびラテン帝国の建国により決定的になる。結果としてビザンツの広大な領域はフランコクラティアと呼ばれるラテン人の国とニカイア帝国、トレビゾンド公国、エピロス専制公国などの帝国の亡命政権といった勢力に分けられることとなった。後の1261年にニカイア帝国のミカエル八世によってコンスタンティノーブルは奪還され帝国は再建されるも（1204年の陥落によってビザンツは滅び、このころのビザンツをそれとは別の勢力とみる見方もある。）その力は大幅に衰退した。経済において強力な力を持っていた行政機関が解体されたため、政治的な影響により工業も業種によって速度の違いはあれども衰退していくこととなる。オスマン帝国による支配の時期までこの工業力が復活することはなかった。また、地中海貿易におけるこれまで帝国が占めていた地位もイタリア人に追われた。これにより、帝国の貿易は国内や狭い地域内の貿易に限られた。さらに、帝国がいくつかの亡命政権に分かれたことによりかかっていた管理費はもとよりも増大し、インフラの整備は不十分になった。異民族の侵入によって農業にも多大な影響が出た。以上のことより帝国の経済規模は縮小した。ステファン・ドゥシャンによる侵攻やトルコ人の侵入を経て、1453年オスマン帝国によるコンスタンティノーブル陥落により帝国は滅亡するという結末を迎える。前出のミカエル八世によって創始されたパレオロゴス朝期（1261年から1453年）における古典復古および文化的繁栄がいわゆるパレオロゴス朝ルネサンスである。



パレオロゴス朝ルネサンス当時のビザンツ帝国（上図）

## II、パレオロゴス朝ルネサンスについて

パレオロゴス朝ルネサンス期においては正教会が古代ギリシャの文献についての研究を黙認した。そのため、古代ギリシャの古典的な文学や哲学科学の作品についてこれまでにないほど精力的かつ計画的な研究がなされた。アリストテレスやプラトンについての評論家は注意深く分析された。またトゥキディテスなどの古代の歴史家や古典劇、叙情詩などについての研究も進んだ。さらに、ビザンツの学者はその学習法を確立する過程でスケドグラフィアという技法を生み出した。その技法は、テキスト全体を数行ずつに分割したのち、それに対して脚注をつけたり言い換えた文章をつけたりするというものである。これらの研究成果や技法は帝国の移住者（原本で使われていた”emigre”という単語は亡命者、移住者等の訳が可能である。最も亡命してきたものも存在するがここではより包括的な移住者の訳を用いる。）によってイタリアで広く使われ、当地の文化的発展につながった。

## III、パレオロゴス朝ルネサンスのイタリアルネサンスへの影響

前項でも書いたように後者には前者の影響がはっきりとみられる。この項ではフィレンツェ、ローマ、ヴェネチアといった特にその影響の強い都市における影響についてそれぞれ見てい

く。

## 1 フィレンツェ

フィレンツェは初期に古代ギリシャについての研究の中心となった。古代ギリシャについての研究は 1361 年にレオンティウス・ピラトゥスがフィレンツェ大学のギリシャ語の教授として任命されたことに始まる。この時、彼はホメロスのラテン語訳をしていた。彼の翻訳は同時代の人々の批判を浴びたが、その精度は当時では素晴らしいものであった。のちにはマヌエル・クリソロラスが文化の発達に大きく貢献した。彼は当初はトルコ人に対する軍事的支援を求める外交官としてマヌエル二世とともに来たが、マヌエル二世の帰還後も当地に残った。彼はプトレマイオス著作の「地理学 (ジオグラフィア)」やプラトンの「国家」の翻訳に携わった。「国家」については彼の弟子やその子供によって完全に訳されるが、「地理学」については一部不正確ではあったが彼自身で完全に訳している。また、彼のイタリアルネサンスについての貢献について書くときに必ず触れておかねばならないのが彼によるイタリア人へのギリシャ語指導である。彼はそれ以前に作られた文法書がなかったため自身で質問集と訳される *erotemata* という文法書を作った。また、彼は帝国で使われていたものと同じシステムを使って生徒への教育を施した。彼の教育を受けた生徒のほとんどが人文学者となりギリシャ語の翻訳を一層進めた。特に、ブルーニはそれまで逐語訳のものしかなかったアリストテレスの「政治学」をより分かりやすいものとした。それに加えて、彼は「修辞学」、「倫理」といったアリストテレスの著作を訳した。また、彼はギリシャの雄弁家であったアリストティデスの理論を用いて民主主義を訴えたため当時ミラノを支配していた専制的なヴァイスコンティ家と対立した。彼はこのようにギリシャの政治的な考えを模倣するだけでなく、同時代の出来事にも適用した。フィレンツェでのギリシャ研究に大きな影響をもたらしたのはゲミストス・プレトンの来訪である。彼のネオプラトニズムを基盤とした異教徒への理論は多くの人を魅了した。彼の理論によりプラトンおよびプラトンと対置してみられることの多かったアリストテレスのラテン語翻訳が進んだ。それまで修辞学の研究に偏っていたフィレンツェの人文学者に哲学的な観点をもたらしたのがジョヴァンニ・アルギオロプローロである。彼はフィレンツェでアリストテレスやプラトンそれに加えてソクラテス以前の哲学者など様々な人物に関しての講義を行った。また、彼自身、卓越したラテン語とギリシャ語両方の才能を持っていたため、プラトンやアリストテレスをラテン語訳している。彼の影響を受けたマルシリオ・フィッチーノのもとでフィレンツェはプラトン研究の中心となった。また

ジョヴァンニとともに研究をしていたアンジェロ・ポリツィアーノはビザンツからもたらされた知識と彼自身のラテン文学の知識を組み合わせた。彼はそこから古代の詩や散文における繊細で美しい内容や形式を学んだ。そこから得た知識を彼自身のラテンまたはイタリア語の文学作品に生かした。これこそ、フィレンツェにおける人文主義者の目立例といえるだろう。このように、ギリシャ語の文法や単語、語法あるいは古代ギリシャの歴史学者の文献が伝わった。その影響を受けてマキャベリやブルーニといった人物はその影響を色濃く受けた作品を作った。またビザンツからもたらされた文献における考え方は様々な点で影響をもたらした。これはパレオロゴス朝ルネサンス期の学者やその時期の研究成果が確かにイタリアルネサンスに貢献していたと分かる一例であろう。

## 2 ローマ

ニコラウス5世がローマ教皇であったころにローマは古代ギリシャ研究が盛んになった。ローマにおいて古代ギリシャ研究の中心となったのはニコラウス5世とビザンツ人の枢機卿であったベッサリオンによって古代ギリシャの文献やビザンツにおける教父の教えをラテン語訳を主目的として創立された学園であった。その学院にはビザンツの滅亡以前のコンスタンティノープルに行って研究していたものさえもいた。そこで活躍していた主要な翻訳家がトレビゾンドのゲオルギウスである。(テオドロス・ガザについては長さの都合上割愛する)彼はフランツェスコ・バルバロに招かれてクレタ島からヴェネツィアに来た。バルバロはゲオルギオスのパトロンであり、彼にギリシャ語の写本を約してもらったり、ラテン語を教える代わりにギリシャ語を教えてもらったりしていた。ゲオルギウスはイタリアでラテン語を学びその修辞学を教えることを目標としていた。彼は高名なラテン語学者であったヴィットリーノ・ダ・フェルトレにラテン語を教わった。後に彼は、古代ギリシャの修辞学栄光と呼ばれたヘルモゲネスの修辞学をキケロの修辞学と組み合わせた。彼の理論はイタリアの人文主義者に徐々に取り入れられ、キケロやクインティリアヌスのそれにとってかわった。また彼はニコラウス5世やベッサリオンの要求にこたえて11もの古代ギリシャの主要な文章をラテン語に訳した。彼の訳した天文学や数学について扱っているアルマゲストは標準的に受け入れられそれからの天文学や数学の発展に非常な貢献をした。また、彼はケンティロクイウムという占星術に関する本も訳したが、それはルネサンス期の天文学の発展に大きく寄与することとなる。彼はビザンツの教父についての話も彼の書いた本を通じて西洋にもたらすこともした。このように、彼は古代ギリシャだけでなくビザンツに関する知識をも西洋

に広めた。また、新約聖書研究に貢献したことで知られるロレンツォ・ヴァッラがこの時代の主要なビザンツ人の人文学者であった。彼はウルガタと呼ばれる新約聖書とギリシャの新約聖書を比べることで、ウルガタ聖書の間違いを指摘した。また、彼は一部の陶酔的、創造的な神秘的な使徒に関する記述について疑いの意見を述べた。トレビゾンドのゲオルギウスやガザラの使った古代ギリシャの作家やギリシャの教父についての原本の多くはベッサリオンの収蔵品から来ていた。彼は様々なラテン人たちと協力して印象的なほどの数の本を収集した。その結果ベッサリオンは数学についての研究を進めることができた。後にルネサンス期の代表的な数学者となる人文学者のレギオモンタヌスにアルキメデスや、アリストテレス名義の「機械学」などの、圧力や天秤に関する本やパププスの力学についての論文を介して影響を与えた。

### 3 ヴェネツィア

大きな大学を持つヴェネツィアとその衛星都市のパドヴァは様々な面で文化的な中心となっていた。ヴェネツィアには最も大きいビザンツ人のコミュニティが存在していた。しかし、そのようなギリシャとの関係にもかかわらずヴェネツィアの人文主義では近隣のフィレンツェやパドヴァからの知識が影響をもたらすまで明確な動きがなかった。それにもかかわらず、ビザンツの崩壊の前後においては、ヴェネツィアの人文学者の活発化がみられる。パドヴァでは医学部と文学部の二つが合わさって一つの学部をなしていた。そのため、パドヴァではその双方を教えられる人材が求められていた。また、パドヴァでは科学やその他の内容のアリストテレスの著作がながらが長らく研究されていたがそれは元のギリシャ語のものではなくアヴェロス主義者（スコラ派の一派でイブンスユドの考えをスコラ学に取り入れようとした）によって訳され解釈されたものであった。いわゆるアヴェロス主義者の説は15世紀中期から後期にかけて優位であったが、ビザンツの移住者はそれに異議を唱えた。しかし、ギリシャの版のアリストテレスは抵抗によりパドヴァにおいて受け入れられることはなかった。主要なヴェネツィアの人文学者であったエルモラオ・バルバロとジローラモ・ドナティのもとで受け入れられ始めた。その後、1463年にベッサリオンらの強い要求によりギリシャ語の教授がパドヴァ大学におかれるようになり、その職にはデメトリオス・カルココンデユレスが任じられた。彼は就任演説においてアヴェロス主義者による間違いの多い写本や訳を批判し、それがイタリアで使われていることを嘆いた。後の1470年にはトレビゾンドのゲオルギウスがプラトンの重要な著作である「法律」をラテン語訳したものをヴェネツ

アの議会に送った。以上のような活動によりギリシャ語版のアリストテレスへの支持を得て、ギリシャ語訳を重視する人々と立場を固めつつあったアヴェロス主義者の対立は深まっていた。1472年にはベッサリオンが多数のアリストテレスの著作を含むギリシャ語の写本で構成された彼の図書をヴェネツィア議会に遺贈した。これを含めた古代ギリシャの注釈書における明白な優位性やバルバロに加えてビザンツの学者らに影響されて（もっとも、当時のカトリック教会による反発も原因の一つであった。）1490年にはアヴェロス主義者の筆頭であったニコレット・ヴァルニアがその思想の根幹となっている魂の不滅性を否定した。続いて、彼の弟子のアゴスティノ・ニフォもポンポナッツィ反駁靈魂不死論を書き同様にアヴェロス主義を否定する立場に回った。これはビザンツの翻訳が確かに受け入れられたことの証左といえるだろう。また、この時期には「機械学」、「経済学」、「問題集」といったアリストテレスの名義で書かれた本（彼の弟子によって書かれたものとされる）についての研究も進んだ。これらの本における考え方はビザンツからもたらされた正確な写本とビザンツからの移住者による精巧な翻訳も相まってパドヴァで非常に尊重された。また、この時代にギリシャの思想を広めることに貢献した人物として挙げられるのがパドヴァ大学のギリシャ語教授であったマルコス・ムスロスである。ムスロスはアリストファネスやプラトンといった古代ギリシャ人の著述家の多数の初版本を刊行した。彼は、1495～98にかけてアリストテレスのオペラをギリシャ語で発行した。この刊より、はじめてのギリシャ語の正確（ある程度ではあったが）なアリストテレスの文を得ることができた。後に、アルドゥス（後述）によって初めてのテミスティウスやアフロディシアスのアレクサンドロスの訳がなされた。また、同時にムスロスはポリビウスでなくパウサニアスとヘシキウスの訳を行った。これは、当時ポリビウスがその、分析力、分析形式、複合的な理論の重視などにおいて評価され、ヴェネツィアやフィレンツェでマキャベリやグイチャルディーニと並んで人気の作家であり、また、ローマ時代初期について書いた数少ない歴史家の一人であったことを考えると、非常に驚くべきことである。ムスロスとならんで、パドヴァで教鞭をとったのがニコラス・トマエウスである。トマエウスは彼のパドヴァでのアリストテレスの哲学の指導の過程で、形而上学や倫理、物理、生物、論理学といったそれに関するものを幅広く扱い、またその講義がギリシャ語のテキストに準拠したものであったことが有名である。彼の生徒には後にカンタベリー大司教となるレジナルド・ポールもいた。また、彼はその訳書についても好評価がなされている。彼の訳した、アリストテレスの名義で書かれた本（彼の弟子によって書かれたものとされる）である「機械学」の中で、数学を重視し、これまでの定性物理学から新しい

物理学への移り変わりをもたらした。その結果、それが初期の近代科学の発展につながったのである。彼はプルタルコスによって書かれた倫理学論集において多大な貢献をなすなど、文献学においても大きな活躍をしている。彼生徒には後にカンタベリー大司教となるレジナルド・ポールもいた。貢献した人物として挙げられるのがアルドゥス・マヌティウスである。彼は1508年に「*rhetores graeci*」を出版した。それは、「修辞学」、「詩論」といったアリストテレスの作品を含んでいる。一方、デメトリオス・ドゥーカスが書いた同名の著作においてはヘルモゲネスが大半を占め、アリストテレスについてほとんど触れられていない。この違いは西洋において、アリストテレスの倫理や政治学についての考え方が強調され、彼の修辞学についての考えは広まっていなかったことを反映している。事実、「詩論」については同じくアリストテレスの著作であり、論理学について記したオルガノンと内容を混同させて中世やルネサンス初期の学者が読んでいたため、内容が誤解されていた。彼らビザンツの学者やバルバロ、ヴァッラらによってはじめて、それが美について記した作品であることが伝えられたのである。話題をトマエウスに戻す。彼は、フィレンツェとパドゥアの人文学の繋がりを作った。トマエウスはとても柔軟な考え方を持っていた。彼は、アリストテレスについて詳説する中でアリストテレスの誤りについて認め、時にはアリストテレス自身のそれよりも彼と対立するアヴェロス主義者の解釈の方を尊重する事さえあった。彼の知性と魂の不滅性を結びつける議論はポンバナッツィの魂の不滅性への議論につながった。(もっとも、それを示すことはできなかったが)パレオロゴス朝ルネサンスの学者のように、彼はプラトンとアリストテレスの両方に興味を持っていた。彼は2人の派閥の間を取り持とうとしたのである。その結果、彼はフィレンツェで一世紀続いたギリシャの学者の間でのプラトンとアリストテレスのどちらが優れているかの論争に終止符を打ったのである。これらの人々の働きにより、16世紀末にはすでに多くのギリシャの文学作品や哲学書、化学書が出版されていた。

#### 4 結び

イタリアルネサンス以前には多くの古代ギリシャ人の洗練された複雑な文章を含む、ギリシャの多種多様な書き物が来ることはなかった。特にプラトニズムの本はほぼ全てがこの時期にもたらされた。また、アリストテレスの本やその関係者の本がもたらされたことにより、アリストテレスの説が再度重視されるきっかけとなった。より影響をもたらし、数も多いのが文学作品や歴史叙述、雄弁家の作品である。修辞学についても、ビザンツの写本のほぼ全

てが持ち込まれた。文学、科学、哲学、と言った様々な分野での名著だと言えるこれらの作品は現在のヨーロッパの文化の形成に大きく役立った。これらすべての作品が取り入れられる中でビザンツの学者が大きな役割を果たした。彼らのもたらした学問の受容、拡散、同化の過程を見ることによって彼らが記述の意味や表現方法のスタイルといった文献の解釈にも大きな役割を果たしたことがうかがえる。実際、複雑な内容の著作はビザンツの伝統的手法によってのみ、その内容を正しく理解することができたのである。しかし、テキストの教育や編集、出版によってビザンツの学者がのように当時のイタリアルネサンス期の考え方に貢献したかという観点から彼らのはたらの働きを見ることも重要であるように思う。フィレンツェでの前期の古代ギリシャ研究の時期にはクリュソラスが彼の見事なまでの教育法を通して、長く忘れ去られていたギリシャ語やギリシャ語の文学はフィレンツェから全イタリアまで広がることとなった。後期には、イタリアの人文学者やプレトンではなく主にアルギオロプーロの教育の結果、人文学から修辞学や形而上的な哲学へと方向性が変わることとなった。フィレンツェの人文学の基軸のプラトン神学への推移は彼の教育によるものだった。当然だが、彼だけでなくほかの多くの関係者や環境による影響もあった。事実、フィレンツェでメディチ家による専制政治が始まったことは当地での人文学に大きな影響をもたらしたことも原因の一つといえるだろう。しかし、他と比べても彼の貢献は大きなものだったといえる。ローマにおいて古代ギリシャ研究が栄えた時期にはベッサリオンの指導の下、多くの重要なギリシャ語の本が初めて訳された。また、彼らのこの働きによって西洋の人々が、ギリシャの本の正しい解釈を得るためには著者に近い古代ギリシャか初期ビザンツの学者がよいと認識することにつながった。ベッサリオンは当時、優れた見識やビザンツとラテンの考え方や手法を融合させる能力をもったもっともすぐれた学者だった。実際、彼は広い支援網や大きな影響力によって15世紀の古代ギリシャの研究の進展のほぼすべてにかかわっていた。この時期において彼は彼の性格やイタリアおよびビザンツの学者とのつながりや彼の持つ質の高く、量も膨大な写本、キリスト教徒プラトンの思想との親和性を説いた彼の論文、聖書の研究の点でヴァッラに数学においてレギオモンタヌスにもたらした影響、古代ギリシャ学の研究の教授の位を設けるための役割、東西キリスト教会の自然な統合を目指そうとしたことなどを通じてベッサリオンはイタリアルネサンスの発展の過程においてほかのどのビザンツ人よりも大きく、幅広い役割を果たした。ヴェネツィアおよびパドヴァでの古代ギリシャ学繁栄期において移住してきた著名なビザンツ人はアルドゥス・マヌティウスの出版所で出版している。さらに、さらに、バルバロの援助のもと彼ら学者らによって中世

の訳書と比べた時のギリシャ語版のアリストテレスの書籍の優越性を当時の人々が認めるようになっていった。以上で見てきたように、(ベッサリオン、ガザ、トレビゾンドのゲオルギウス、アルギオロプーロなど一部を除いて) ビザンツ学者の業績は主に既存の本の解釈や翻訳であり、その考え方はそれほど独創的ではなかったといえる。しかし、ルネサンス期の学者が一部を除いてレオナルド・ダ・ヴィンチやガリレオに至るまでそれほど独創的でなかったことを考えると、決して彼らが劣っていたわけではないと分かる。古代ギリシャ研究についてのビザンツ人学者の再評価について忘れてはならないのが、研究発展のための土壌である。それには主に四つの要素が存在した。一つ目は、フィレンツェやほかの都市のイタリア人の人文学者が研究を彼らの都市のモデルとして模倣し、自身の正当化の手段として用いようとした結果、彼らがその研究を切望したということである。二つ目は、アルドゥスやその他ビザンツ人学者に対する教皇の庇護や強力な経済力を持つヴェネツィアの援助である。それらは研究の発展に確かに貢献した。三つ目は、一部のイタリア人にはコンスタンティノープルにてギリシャ語を学んだ者の存在である。彼らは、ビザンツの伝統が彼ら自身のそれに順応するのに貢献した。四つ目は、印刷技術の発明である、それは、ビザンツが衰退し始めたときと同時期の産物であり、古代ギリシャの思想が後世に残ることにつながった。ギリシャ語の重要性にもかかわらず、それはイタリアの人文学者にとってはあくまでも外国語であり、少数のものしかそれを習得しなかった。しかし、その少数のうちほとんどが主要な思想家たちであり、彼らの純粋で独創的な努力がレオナルド・ダ・ヴィンチやマキャベリ、ガリレオの業績へとつながった。ビザンツの学者の実績や前述の彼らの能力を鑑みて、彼らについて再評価すると、「イタリアでの古代ギリシャの学問の復興はビザンツの学者によって始められ、彼らと切って離すことはできない。それが始まったのちもビザンツの学者はその発展の基盤となったラテン文化と彼らのその統合を様々な要素において不完全ながらも成し遂げた。」ということが言えるだろう。

#### IV 考察

1 前半ではパレオロゴス朝ルネサンスについて述べる。パレオロゴス朝ルネサンスと他のルネサンスと称されるものを比較すると、前者には非常な特異性があることがわかる。後者の例をいくつかあげると、例えばイタリアルネサンスはイタリアが経済的にもとても豊かな時代に起きている。12世紀ルネサンスはヨーロッパ全体の経済発展の時期の事象であり、ビザンツ帝国のマケドニア朝ルネサンスもかの帝国が最盛期を迎えた時のことであった。しか

しながら、パレオロゴス朝ルネサンスについては一章で見たようにむしろ衰退期における事象なのである。非常に興味深いこの現象の原因に関しては様々な説が存在するが、個人的には井上浩一氏の帝国の衰退に直面した人がそのかつての繁栄を想起するためにこの運動がおこったという説を推したい。

2 後半では、パレオロゴス朝ルネサンスやその産物およびその時期の学者のイタリアルネサンスへの影響について考察する。学者らは多くのギリシャ語の本を現地語に訳すことで、現地の学問の発展に大きく貢献した。彼らの思想はイタリアルネサンスを通じて発展し、君主論を記したマキャベリやレギオモンタヌスなど後のヨーロッパの学問の発展を担う人物へと受け継がれた。従来、古代ギリシャの学問の保存や、そのヨーロッパへの伝播についてはイスラムの働きが強調されたが、ビザンツの働きも同様に強調されるべきであるように思う。

出典

Deno John Geanakoplos . 『Constantinople AND THE WEST』 . The University of Wisconsin Press. 1989.

P3～p35

写真は上の本 p 3 0 より

Angeliki.E.Laiou. 『 The Byzantine economy 』 . Cambridge University Press. 2007.p166

The editors of Encyclopedia Britannica. “Manuel chrysoloras”. Encyclopedia Britanica. Jul 20, 1998.

<https://www.britannica.com>, (参照, Apr 18, 2024).

The editors of Encyclopedia Britannica. “Latin Averroism”. Encyclopedia Britanica. Jul 20, 1998.

<https://www.britannica.com>, (参照, Apr 28, 2009).

The editors of Encyclopedia Britannica. “Agostino Nifo”. Encyclopedia Britannica. Jul 20, 1998.

<https://www.britannica.com>, (参照, Mar 29, 2024).

The editors of Stanford Encyclopedia of Philosophy “Pietro pomponazzi”. Stanford encyclopedia of Philosophy. Tue Nov 7, 2017. <https://plato.stanford.edu>, (参照, Tue Oct 19, 2021)

井上浩一・栗生沢猛夫.『世界の歴史 11 ビザンツとスラヴ』.中央公論社.1998. P210  
参考

Jonathan Harris.(2015) , *The Lost World of Byzantium*, Yale University Press

(井上浩一 (監訳) (2018). ビザンツ帝国 生存戦略の一千年 白水社)

# 大内義隆の生涯 ～武家としても最盛期、公家としても最盛期、されど戦国三大愚人～

81 回生 丸山遥輝

## 1章 大内家の歴史

### 0.はじめに

途中、戦いの名前を書いていることがあります。戦いの名前を書くだけで済ませているものは、比較的マイナーか、今回の話にあまり関わらない話となります。気になる方は各自調べてみてください。

### 1.室町時代初期の大内家

室町時代、大内家は一時期和泉・紀伊・周防・長門・豊前・石見の6ヶ国をも領する守護でした。南北朝時代のはじめ、周防国一国の主だった大内家は北朝について足利尊氏を支援していました。しかし、すぐに大内家内で家督争いが起こってしまい、家中が北朝派と南朝派で二分することになってしまいました。この争いは、南朝方の大内弘幸が勝利します。こののち、大内弘幸は北朝派の長門国守護厚東家を本州から追い出し、長門国を制圧します。この勢いを恐れた足利尊氏は、大内家を長門国の守護に任ずる代わりに北朝に味方するよう大内弘幸に要求し、大内弘幸はこれのみます。

大内弘幸の跡を継いだ大内義弘は、九州探題の九州制圧に従軍したり、南北朝合一の交渉の仲立ちをしたり、(1392年)明德の乱と呼ばれる山名家の幕府への反乱の鎮圧で武功を上げたりと、着実に名声を高めていった結果の6ヶ国守護だったわけです。しかし、この大内家の勢力を危惧した足利義満と対立してしまい、結果反乱を起こすも敗死してしまったのです(応永の乱)。大内家の家督は大内義弘の弟、大内弘茂に継がれましたが、再び周防・長門の2ヶ国の守護へと成り下がってしまいました。

こののち、またも大内家内で内乱が発生し、新たに当主に就いた大内義弘の弟、大内盛見は、北九州へ目を向けることとなります。途中大内盛見自らが討たれてしまうなどの損害はあったものの、最終的には少弐家や大友家を征伐し、大内家は豊前・筑前の守護にも任ぜられることになりました。こののち、博多港は大内家の要の港として、重要視されていくこととなります。

### 2.大内家と日明貿易

博多の海を得た大内家は、以降日明貿易で儲けていくこととなります。もうひとつの資金源であった石見銀山は、隣接する尼子家と奪い合いが起きていたために、安定した利益が出せませんでしたが、博多の海は大内家滅亡の直前まで、一度も他家によって占領されてしまうことはありませんでした。

時系列が前後してしまうようで恐縮ですが、先に応仁・文明の乱以降の日明貿易の話をしたと思います。応仁・文明の乱の後、室町幕府が日明貿易を行う権利を有力守護大名らに譲りました。堺を拠

点とする細川家と、博多を拠点とする大内家は主に日明貿易を行っていました。後ほど詳しく解説しますが、大内義興(大内義隆の父)が上洛した際、とある偉業を成し遂げた褒美として、大内家が日明貿易を実質独占する権利を手に入れることになりました。大内義興が本領に帰ってからは、細川高国が日明貿易の交易権を奪われた格好になったことへのへの不満をあらわにし、大内家と対立姿勢を見せ始めます。1523年、大内家と細川家はそれぞれ遣明船を送りますが、細川家側の商人の賄賂により、明での待遇は明らかに細川家側が優遇されていました。これに怒った大内家側の正使であった謙道宗設は、細川家側の正使であった鸞岡瑞佐を殺害し、細川家の遣明船を焼却してしまいました。この他にも、逆ギレとも言える意味不明すぎる殺害・暴力行為を行ったのです(寧波の乱)。この乱以降、明は日本の遣明船に対して厳しく規制するようになり、細川家は以後日明貿易を行わなくなってしまいます。こうして、日明貿易は完全に大内家が独占するようになりました。大内義隆が存命のうち、この日明貿易は続けられることとなります。

### 3. 応仁・文明の乱と将軍世継ぎ問題

大内政弘という人が大内家の当主であったころの1467年、かの有名な応仁・文明の乱が起きます。応仁・文明の乱について直接的には大内家に大きくは関わらないため大部分は省略しますが、のちのち関わってくる話があるので、少し触れます。将軍世継ぎ問題についてです。

(家系図の画像)

応仁・文明の乱は、足利義政の息子である足利義尚と、弟である足利義視との将軍世継ぎ問題が要素のひとつとなっています。朝倉孝景の東軍寝返りを機に西軍は戦い続けることが困難となり、細川勝元・山名宗全共に死去したこともあり、ほどなく西軍と東軍は和睦となります。その後、この騒乱の責めを負うとして、足利義政は将軍職を足利義尚に譲りました。

足利義尚は、なおも将軍家に反抗する六角家の討伐に向かうなど、武家の棟梁としての権威を復活させ始めます。応仁・文明の乱はただの一時的な混乱だったのだと世間に思わせたのですが、1489年、足利義尚は陣中でなんと病死してしまったのです。この後、再び足利義政が将軍代理となりますが、1年後の1490年に義政もが病死してしまいます。こうして、再び将軍世継ぎ問題が始まってしまいます。

### 4. 2度目の将軍世継ぎ騒動

今度は、足利義視の息子である足利義材と、堀越公方(事実上の関東公方)足利政知の息子である清晃(以下、還俗後の名としては最も一般的な足利義澄という)とで将軍世継ぎ問題が起こります。従兄弟同士の対立ですね。同時期に起こった堀越公方の世継ぎ問題も関わってくる部分がないのですが、さすがに関東ともなるとあまり大内家と関わりの無いお話になるため割愛します。通例では、足利義教の三男の息子となる足利義材が継ぐものですが、応仁・文明の乱があんなに長引いた一番の元凶は足利義視の西軍鞍替えなので、があろうとも継がせたくない細川政元は考えたのです。ですが、足利義材の母は、日野富子の妹の日野良子であるため、細川政元は日野富子と敵対してしまいます。足利義政が生前将軍職は足利義材が継ぐようにと言っていたことや、日野富子が朝廷と深い繋がりを持っていたことなどから、結果的に足利義材が次期将軍となりました。

ですが、この後、足利義材の父である足利義視の態度がうざったらしいほどにでかくなってきます。足利義視は自らの権力を確立を目指すのですが、これがなんとも横柄なもので、日野富子もこれに呆れて細川政元派に鞍替えしてしまったほどです(日野富子は、政を独り占めにしたい足利義視と次第に対立していき、自分の領土を奪われたり、館を破却されたりもしました)。幕政は管領であった細川政元が握るという約束のもと、足利義材を将軍職につかせる事を渋々承諾していた細川政元は、幕政の権利を独り占めし始めた足利義材に強い不満を感じ始めます。そこで、細川政元は足利義材を京から追放して、足利義澄に将軍職を継がせるという計画を企て始めます。正式に足利義材が将軍を継いでから、足利義視の発言力は高まりますが、1491年に腫れ物で亡くなってしまいます。このことに足利義材は焦り、将軍家に反抗する諸大名の討伐を急ぐようになります。足利義材が畠山家の家督争いを収束させるべく河内国に出兵して、京が留守になったいるときを狙っていた細川政元らは、1493年にこの政変劇を見事成功させます(明応の政変)。

## 5. 将軍世継ぎ騒動で棚からぼたもちの大内義興

さて、足利義澄に強引に将軍を変えた細川政元でしたが、まもなくして日野富子が亡くなってしまったことや、さすがに強引すぎるとして反抗する大名も多かったことなどから、苦労は絶えませんでした。そのころ、足利義尹と名を改めた前将軍の足利義材は、越中畠山家や神保家らの力を借りて、将軍職に返り咲くべく再度上洛を目指しました。しかし、近江の六角高頼に敗れてしまいます。そして足利義尹が次に頼った先は、大内義興だったのです。

京では1507年に細川政元が暗殺され(永正の錯乱)、その養子3人の間で細川家の家督争いが起きていました。ちなみに、この3人のうち最初に家督争いをしていたのは細川澄元と細川澄之であり、もう1人の養子であった細川高国は細川家のつぎの当主として擁立されていませんでした。ですが、最終的にはこの3人は全員一時政権を作るものの戦死、もしくは追い詰められて自害という最期をたどることになってしまうのです。最終的に細川家をまとめあげるのは、細川澄元の子の細川晴元だったのですが、この細川家の内紛により家内はガタガタであり、大物崩れで細川家の譜代衆を多く失ってしまったことから、結局三好長慶にほぼすべてを吸い取られてしまうのです。細川政元が妻を持たなかったのが遠因なのかもしれません。

話を戻しましょう。前将軍足利義尹はこの細川家の内紛を上洛の好機と捉えます。一向に足利義昭を土着させなかったどこぞの義景さんとは違い、大内義興はこれに応えます。

## 6. 大内義興の上洛と細川高国との連合政権

大内義興は、出雲の尼子経久や、安芸の武田元繁、毛利興元(毛利元就の兄)などの有名な将も引き連れ、大規模な上洛軍を編成します。大内義興は細川高国を支援し、細川澄元ら(以下、反高国派と書く)との戦いに勝利。1508年に足利義尹を見事将軍に返り咲かせました。しかし、反高国派は根強く抵抗を続けたため、戦乱は収束とはなりません。1511年、ついに芦屋河原の戦いで細川高国が敗れたことから、反高国派の畿内進出を防ぐ最前線の砦として造られた鷹尾城(鷹尾城山城、芦屋城)が落城してし

まい、ついに京に反高国派が侵攻し始めてしまいます。足利義尹も京を離れるなど、大内義興は劣勢を強いられました。その後、多くの安芸国衆が京から敵前逃亡してしまったことから、大内義興の上洛軍は瓦解したかのように思われました。

しかし、反高国派が擁立する前將軍足利義澄が亡くなったことで息を吹き返します。そして、同じく1511年の永正船岡山合戦で細川高国・大内義興らは大勝利を飾り、以後反高国派は瓦解していくことになるのです。大内義興は、管領代の職を手に入れました。最終的には、官位は従二位にまでのぼりつめることになります。この後細川高国や大内義興は足利義尹と対立してしまい、大内義興はしばらく京に残っていたいという情勢でした。

しかし、本領でもいくつか問題が起こっていました。敵前逃亡した安芸国衆への対応や、厳島神主家の後継者争いを鎮めるべく安芸に帰した武田元繁が大内家と敵対したことへの対応は、京からの指示で一旦はなんとかできました(有田・中井手の戦い)。ですが、尼子経久が出雲に帰り、大内家に反抗して石見銀山を狙う兆しを見せていること、そして上洛の一番の目的であった日明貿易の独占を將軍から認めてもらうことがついに叶ったことから、大内義興も周防に帰ることになりました。大内義興としてもこれ以上京に残る理由もあまりありませんし、さすがに博多港での日明貿易に並ぶ資金源を失うことはできなかったのでしょうか。ちなみに、細川高国は1531年の大物崩れでついに反高国派に敗れて自害してしまったことから、これ以降再び上洛することはありませんでした。

## 7.大内義隆、元服

さて、周防大内館に帰った大内義興でしたが、尼子経久の嫡男(長男)であった尼子政久が戦死してしまったこと(阿用城の戦い)から、尼子派国衆らの心は揺れており、ひとまず助かった形となりました。それでも、尼子経久は石見銀山を狙う姿勢は崩さず、予断を許さない情勢は続きました。そんな情勢の中、1520年ごろ、大内義興の嫡男(長男)であった大内義隆は元服します。ここからは、大内義隆がかかわってくる話が増えますので、年号に季節、もしくは月も併記し、あまり端折らずに詳しく解説していきます。

# 2章 武家・大内義隆の生涯

## 0.大内家・尼子家の家臣紹介

大内義隆の生涯について詳しく話していくにあたって、当時の有名な武将たちを知っておいて頂きたいので、ここで大内家や尼子家の重臣たちについて話しておきます。ここで紹介した将は、以後何の断りもなく記事に書いていきます。なお、安芸国衆についてはやや特殊で、安芸国に力を持つ支配者がいなかった背景から、永正の安芸国人一揆と呼ばれる一揆の契りを結んでいた国衆もいたため、「大内家の家臣」「尼子家の家臣」ではなく、「大内派安芸国衆」「尼子派安芸国衆」のような表現でここでは書きたいと思います。また、「大内一門」「尼子一門」は、ここでは父が大内姓、尼子姓である将のみとし

ます。ここでの説明のため致し方なくこの後の展開のネタバレをする部分がありますが、ご了承ください。

## ○大内一門

当主…大内義興→大内義隆

そういえば大内義隆の兄弟って聞かないなあと思って調べてみたところ、一人だけ弟がいたようなのですが(大内弘興)、若くして亡くなっていたため、実績などは残っていないようです。また、大内義興も弟は一人しかいなかったとされています。この唯一の弟であった大内高弘とその子輝弘は、大内義興への反乱の企てが事前に発覚してしまっていたことから大友領に逃げ込んでいたという過去があり、このころの大内家内の大内一門としてはもはや大内義興と大内義隆しかいなかったと考えられるのではないのでしょうか。

絶大な信頼を置ける一門衆がいらないというのは、大名としてはつらいものがあります。普通に考えて信頼を置けるであろう重臣であろうとも裏切られることがあるというのは、大内義隆が後に身をもって知ることになるわけですものね。

## ○大内家家臣

<大寧寺の変で裏切った家>

- ・陶家(周防守護代)

当主…陶興房→陶隆房

一時期は家督争いでガタガタだった陶家でしたが、陶興房が陶家当主となってからは、陶興房自らの活躍もあり大内家の軍師のポジションを確立していきます。

陶興房の跡を継いだ陶隆房は、通説では陶興房の次男とされてきましたが、近年の研究で、後述する問田興之の次男であり、陶興房の実子ではなく養子なのだと言われるようになってきました。陶興房は、長男であった陶興昌の早逝を受けて塞ぎ込んでいた時期があり、その興房を勇気づけるべく提案された案が、その陶隆房(問田五郎)の養子入りだったということです。

陶隆房は美しく賢い将として名高かったようで、陶興房の死後も陶家の中では強い発言力を持っていたのですが、第一次月山富田城の戦いでの大敗を機に、大内義隆や多くの大内家家臣たちと意見が合わなくなり、大内家内での発言力は下がっていきます。

大寧寺の変では、主犯格となります。

- ・内藤家(長門守護代)

当主…内藤興盛

内藤興盛は、大内家の上洛戦の時から活躍を続け、陶興房ほどではないにしても、大内家中ではかなりの存在感を発揮していました。文化人としての一面もあり、まわりからの信頼も厚く、陶隆房も内藤興盛を調略できなければ大内義隆への謀反は決行しないつもりだったという話もあるほど、大内家内では重要な人物だったようです。

大寧寺の変では、苦渋の決断を迫られながらも、大内家を裏切る道を選んだといえます。とはいえ、大内義隆が亡くなった後、内藤興盛の孫である内藤隆世らが、筑前花尾城に攻め込み大内派の有力な将を討ち取っているため、がつつり反乱軍として関わっているという見方もあるでしょう。また、大寧寺の変の後には、内藤隆世は陶家の中で大きな発言力を有していたそうですし、大寧寺の変以降はかなり陶隆房(大内晴英)に協力的だったのでしょう。陶隆房の死後急速に大内家が衰退していく中、最期まで裏切らなかった忠臣です。

#### ・問田家(石見守護代)

当主…問田興之→問田隆盛

なぜか Wikipedia って問田興之のページがないんですね。問田家自体、(陶隆房の問田家出身説が提唱されるなど)最近になって研究が盛んになってきているところなのかもしれません。私はよく知りませんが… 問田家は石見守護代とはいえ、吉見家(後述します)など他にも石見で有力な大内家の重臣がいたことや、そもそも石見の東部にある石見銀山が大内と尼子でよく奪い合う地となっていたために石見国はあまり盤石でなかったことなどから、あまり守護代らしい地位はなかったのではないかと考えられているそうです。

問田隆盛は問田興之の子で、陶隆房の兄です。無論大寧寺の変には深く関わっていたわけで、計画段階から同時に策を決めていたものと思われます。

#### ・杉伯耆守家(豊前守護代)

当主…杉重矩→杉重輔

大内義隆は北九州にも何度か軍を差し向けてはいますが、ここでは中国地方での駆け引きをメインに書いていきたいと思います。そのため、主に北九州を拠点としていた杉家はほとんど登場しません。本当は北九州のことも詳しく書きたかったのですが、あまりにも本記事をゆっくり書きすぎていつの間にか期限が迫っており、北九州について詳しく書く時間がありませんでした。申し訳ございません。

そのため、特に深く書くこともないのですが、陶隆房と杉家は仲が悪かったのにもかかわらず、筑前守護代の杉重矩は大寧寺の変に参加したという、やや陶隆房にとって嬉しい誤算といったことが起こっています。そんな杉重矩は不憫すぎる最期を迎え、その跡を継いだ杉重輔はとんでもない行動に出てし

まうといった事件が発生しますが、それについてはまた後ほど軽く触れます。

・そのほか

青景隆著...備後の最前線、村尾城の城主でした。もともと文治派の有力な将と仲が良くなかったことから、大寧寺の変に参加しています。

羽仁有繁・棚守房顕...まとめて紹介します。この2人はいずれも厳島の関係者で、中でも棚守房顕は大内義隆や(中国覇者となった頃の)毛利元就の御師でした。

2人は陶隆房と仲が良かったことから、大寧寺の変の構想を立てる段階から、この企みに参加していたとされています。彼らの最大の使命は、厳島を戦禍から免れさせ、神聖な社である厳島神社を後世に遺していくことであるため、陶隆房が厳島を戦禍にするつもりはないと考えていたことから、特にこの企みに反対する理由もなかったのかもしれませんが。羽仁有繁は、もともと毛利家とも親睦を深めていたこともあり、大寧寺の変では陶隆房にとっては毛利家を味方に引き入れるにあたって必要不可欠な人物でした。

<大寧寺の変で裏切らなかった家>

・杉豊後守家(筑前守護代)

当主...杉興運

豊前守護代の杉重矩は大寧寺の変に参加しましたが、筑前守護代の杉興運は参加しませんでした。実際、杉家の間では反乱に参加するかなんか意見が割れていたようで、もともと多くの分家を抱えていた杉家はここで大きく2派に割れてしまうこととなります。

・弘中家(安芸守護代)

当主...弘中興兼→弘中隆兼

安芸武田家や、永正の安芸国人一揆の存在もあり、安芸国のトップは誰かというのは非常に難しい質問です。安芸を完全に束ねている存在がないということにもなりますし、実際安芸国は約50年間守護が置かれていませんでした。弘中隆兼が安芸守護代に任ぜられたのは安芸武田家の滅亡後に大内義隆が安芸守護に任ぜられてからです。永正の安芸国人一揆のトップである毛利元就の発言力が安芸では大きく、大寧寺の変の頃には(大内家としての)安芸のトップは実質菅田宣真に代わっているなど、いろいろ謎も多いところです。とはいえ、弘中隆兼は安芸守護代として安芸統治の頭でであったことには

変わりありません。

ちなみに、その父弘中興兼は、大内義隆の直臣として山口にいました。

・その他

吉見正頼...大内義隆の姉婿です。大寧寺の変で裏切らなかった将はそのほとんどが滅亡、または大きく失脚してしまったわけですが、吉見正頼はかなり長らく陶家に抵抗し続けます。結局耐え切れず一度は降伏したのですが、厳島の戦いを経て毛利家が陶家(大内家)を滅ぼせるかもといった情勢になると、再び反旗を翻し、毛利軍とともに大内義隆を追討しました。吉見正頼は見事義弟の仇討ちをなしたこととなります。

相良武任・冷泉隆豊・右田隆次...まとめて紹介します。この3人は大内義隆の直臣といったところで、大内義隆の方針に全面的に賛同していたであろう武将たちです。相良武任は文治派の代表格ともいえる存在で、陶隆房とはガチの喧嘩(殺害を狙うレベルだった可能性も)をしたような仲です。しかし、態度に難があったようで、実際何度か職務を放棄して筑前などに逃げ隠れています。大寧寺の変の際も大内義隆の側にはおらず、直臣としてどうなんですかと真剣に問いたくなるレベルです。対して冷泉隆豊や右田隆次はまさに忠臣といったところで、大内義隆の最期を見届け後、壮絶な死を遂げることとなります。

菅田宣真...弘中家のところで、一時期安芸のトップになった人物的なことを話しました。槌山城主だった弘中隆兼が桜尾城に城替えとなり、その代わりに槌山城に入ったのが菅田宣真でした。槌山城は当時安芸国支配の拠点の言える城であり、この城を手に入れた菅田宣真は、実質安芸のトップ的な立ち位置となったと言えるでしょう。ですが、菅田宣真は Wikipedia が無いほどその出所は詳しく分かっていないようで、個人的ですがなんでこの人物が槌山城主になったのだろうかと思ってしまいます。なお、菅田宣真は青景隆著と同時期に城主となりました(同期でもありました)が、大寧寺の変の際の対応はほぼ真逆でした。ただ、いずれも大寧寺の変の際に自らこれといった軍事行動に出ることはありませんでした。

○尼子一門

当主...尼子経久→尼子晴久(詮久)

尼子家はもともと出雲守護代に過ぎませんでした。尼子経久の代で守護にのし上がり、そのままどんどん領土を拡大していきました。

尼子家は大内家と違って一門衆がそこそこいました。尼子家の尼子一門でない家臣は強い力を持って

いる将は少なく、一人一人が少ない領土を持っているという感じの支配体制です。そのため、一門衆の力は絶大でした。中でも、尼子経久の次男、尼子国久が頭であった新宮党は、特に山陰地方で無類の強さを見せつけていました。ちなみに、新宮党の拠点であった新宮館は、尼子の居城の月山富田城の側にありました。ちなみにと尼子豊久と尼子敬久は、新宮党ではあるものの、拠点は新宮館ではなく大廻城としていたため、この2人はまとめて大廻党と呼ぶこともあります。

有名どころの尼子一門のみ載せておきます。斜体文字は、新宮党(大廻党含む)です。

尼子経久－尼子政久－尼子晴久(詮久)

*尼子国久－尼子誠久*

塩谷興久 *尼子豊久*

*尼子敬久*

ちなみに、この中で尼子家当主になったことのない6人について、尼子政久・尼子豊久は戦死し(政久は後述します、豊久は橋津川の戦いにて)、尼子国久・尼子誠久はしばらく後に尼子晴久の手によって滅亡させられ(新宮党肅清)、尼子敬久は何らかの形でこの2人の後を追ったとされ、塩谷興久は反乱を起こし敗れて自害となる(後述します)という、全員なんとも悲しい最期を迎えてしまうのです。

#### ○尼子家家臣

先述の通り、有力な家臣という概念が尼子家の中にはあまりないため、地域別で有名どころを紹介しておきます。

亀井秀綱...尼子家は基本当主自らが総大将となって軍事行動に出るのですが、そんな中尼子経久から安芸侵攻の総大将に任ぜられていたことがあるほど、力を持っていた武将です。尼子家滅亡の頃まで生きていましたが、尼子晴久が当主となってからはあまり表舞台には出てこなくなりました。

山内直通...尼子家の有力国衆として、北備後で一番勢力を誇っていた国衆です。それなのに、(後ほど詳しく書きますが)理不尽にも尼子家に攻め滅ぼされてしまうのです。

江田隆連・和智豊郷...中備後の国衆です。そこまで有力な国衆というわけでもありませんが、途中で名前を出すので紹介しておきました。

#### ○大内派安芸国衆

毛利元就・毛利隆元...毛利元就は、言わずと知れた名将でしょう。毛利隆元は、その嫡男です。毛利家は、もともと永正の安芸国人一揆の中でも弱い方の国衆でした。しかし、毛利元就が毛利家の当主代理、そして当主となってからは急速に成長していき、最期の頃には中国地方の大半を治めるほどにまでその領土は成長します。一国衆からここまで力をつけていくというのは、毛利家と長宗我部家くらいで

はないでしょうか。毛利元就の存在は、大内家、そして尼子家に大きな影響を与えてきました。あくまで本記事でスポットを当てるのは大内家なので、大内家があまり関わらないことであれば端折っていますが、大内家がかかわることであれば毛利元就の活躍もいくつか書いています。

毛利元就がとてつもなく優秀な将であることには間違いないのですが、毛利隆元はなんというかいろいろ微妙でした。弟の吉川元春や小早川隆景がすごすぎて、毛利三兄弟の中では長兄にもかかわらず最も平凡な将と評価されています。ネガティブ思考で自分に自信が持てない、父が偉大過ぎて父の支えなくてはうまくやっていけない、いろいろ問題を抱えていたようで、毛利元就も毛利隆元のことでは苦心したとされています。毛利元就も家督を隆元に譲ってからは、ゆっくり余生を過ごしたいと考えていたのですが、何せ毛利隆元がファザコン過ぎて(毛利元就が隠居したいと言ったら、「父上が隠居したら私も隠居します!」と隆元が拗ねだして、結局元就が折れたというエピソードもある)、結局60になっても毛利家の実権を握って多忙な日々を過ごすこととなります。しかも、毛利隆元は毛利元就よりも先に亡くなってしまうのです。ここまで苦心して支えてきた息子に先立たれるなんて... 不憫でなりませんね。

沼田小早川正平... 安芸南東部を治めていた小早川家は、沼田(本家)と竹原に分かれていました。この2家を合わせて、小早川家はもともと安芸最大の国衆でした。しかし、小早川家当主は(この正平を含め)早逝が続き、不安定な状態が続いていたようで、それを解決するべく毛利元就の三男が派遣され、小早川隆景として小早川家を束ねていくこととなります。小早川隆景は毛利元就に準ずるほどの軍才を持ち合わせており、小早川家はその後大きく躍進していくこととなるのです。この他安芸国衆はたくさんいますが、このあと安芸周辺の地図を載せますのでそちらに書いておきます。

#### ○尼子派安芸国衆

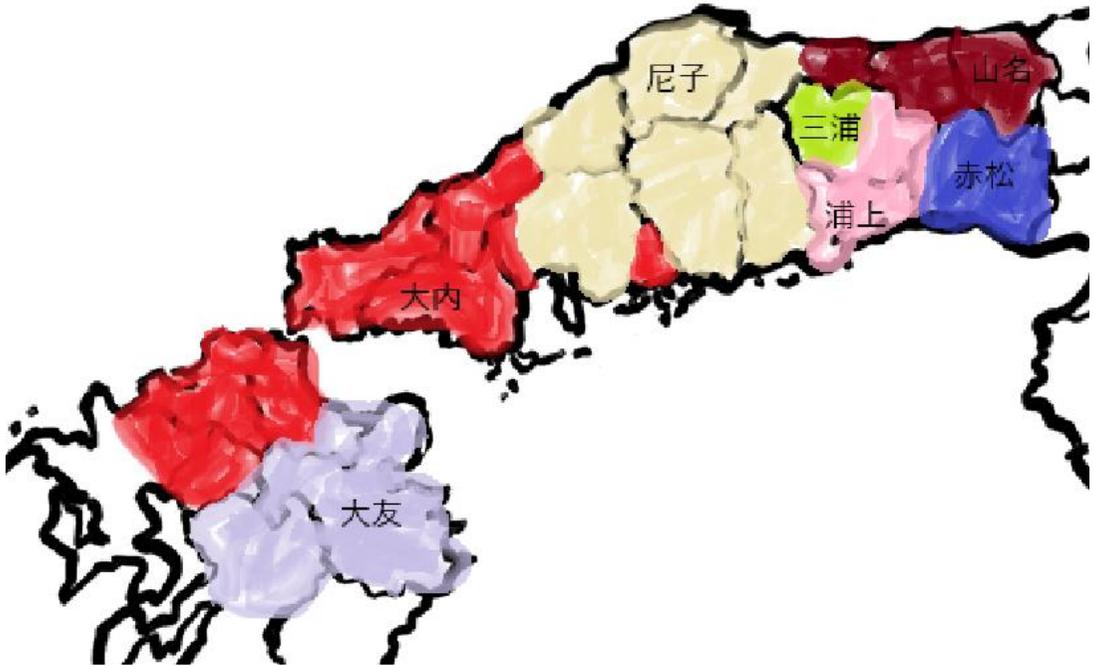
吉川興経...人間性に難がある将です。詳しくはのちほど書きますが、普通に味方の軍の足を引っ張ってくるやっかい者です。基本尼子派ですが、一時期大内派だった時もありました。やらかしすぎて失脚させられ、叔父含め家臣からも見捨てられたほどです。後に、毛利元就の次男が派遣され、吉川元春として吉川家を束ねていくこととなります。

#### ・安芸武田家

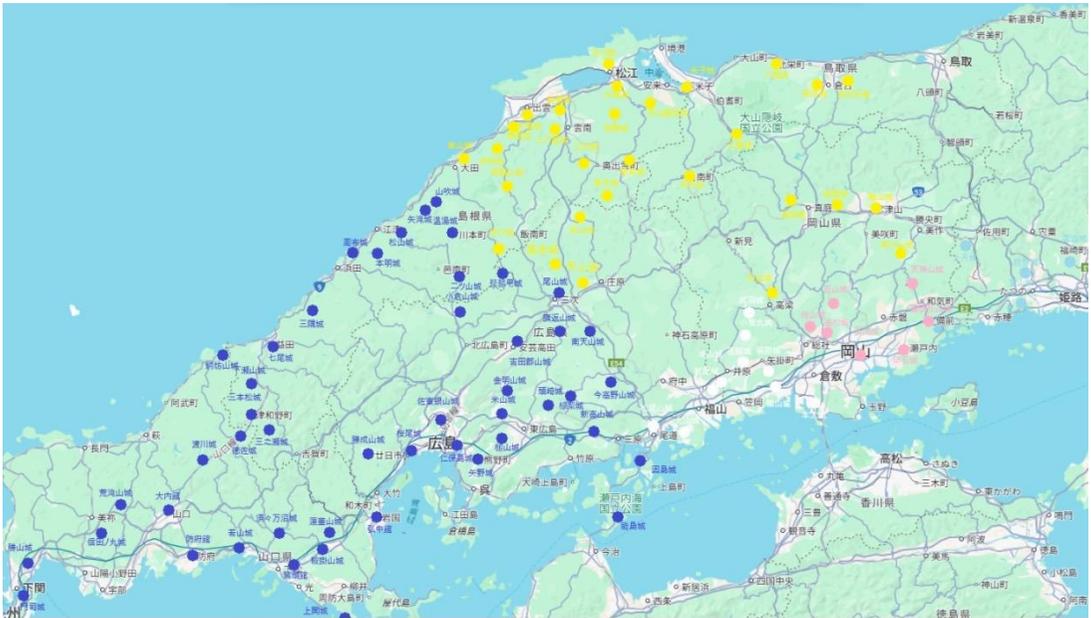
当主...武田光和→武田信実→武田信重

武田光和は、有田・中井手の戦いで討たれた武田元繁の子であり、尼子家と結んで大内家に対抗する姿勢はくずしませんでした。武田光和は大内家と互角に渡り合いましたが、武田光和の死後、安芸武田家

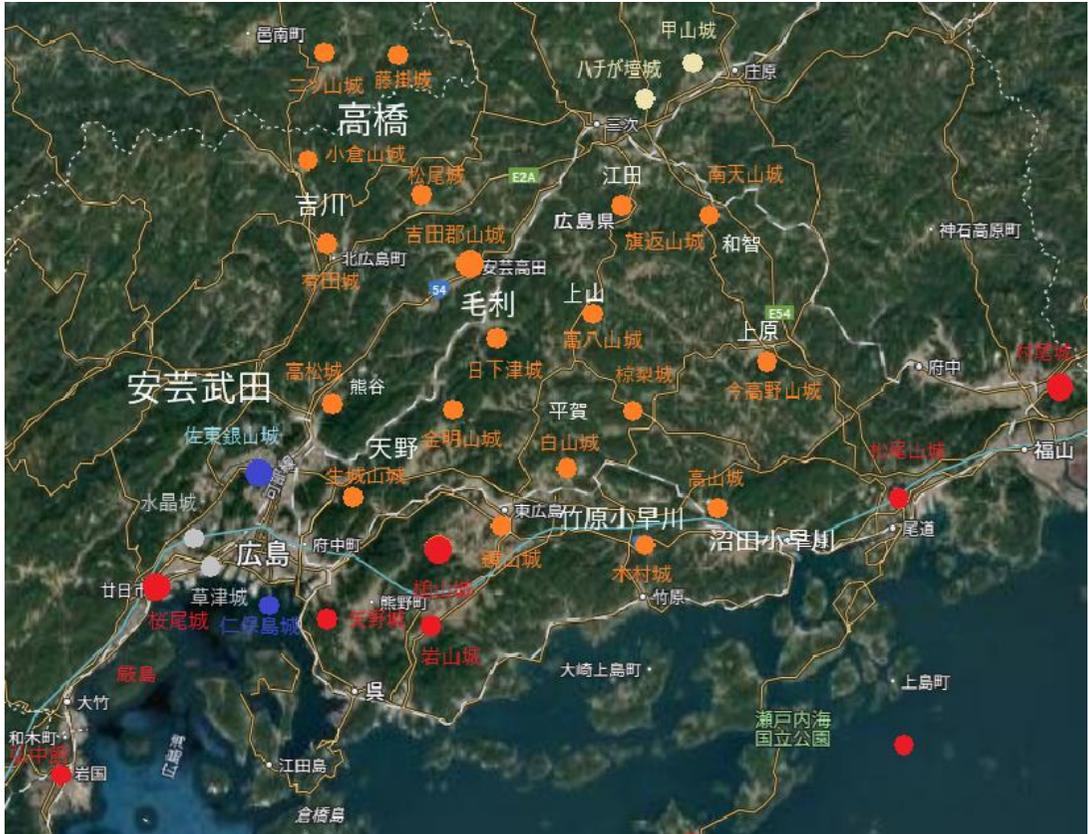
は大きく揺れることとなります。その揺れようについては本文中にある程度詳しく書いています。



↑このタイミングでの大体の勢力図です。



↑中国地方の全体地図です。



↑安芸国衆はこんな感じです。ここに出た城も以後は基本断りなく書いていきます。

## 1.大内義隆、初陣戦

大内義興が京を離れすぎた影響はすぐにも現れました。一度は大内に帰参した安芸国衆の大半が、またもや尼子方に寝返ってしまったのです。また、大内家が日明貿易を、日明貿易を独占することを良しとしない、北九州の太田義長や少貳資元などと対立してしまい、戦線を2つ抱えることとなってしまいました(しかも、両戦線の行き来には関門海峡を船で渡ることが必要)。

尼子経久は、武田光和を手なづけると、1523年の夏ごろには、鏡山城、宮島を落とし、安芸の大半を尼子領とするにまでに至りました。このころの武田家は、ほど触れた厳島神主家を庇護しており、厳島周辺の領土は欠かせないものとなっていきます。

しかし、大内義興も北九州の騒乱をひとまず片付けると、いよいよ尼子の暴走を止めに動き出します。尼子家の本領にほど近い、山名澄之ら西伯耆の国衆に反尼子の狼煙を上げさせることで、ひとまず尼子経久を安芸から撤退させることに成功しました。尼子経久が伯耆に出兵しているすきを突き、大内義興は安芸の奪還に動き出します。宮島を奪還し、安芸灘の小島を制圧して武田本領への侵攻路を作り、さらに武田光和を佐東銀山城(安芸武田家居城、以下銀山城)まで撤退に追い込む(女滝の戦い)ことに成

功します。厳島神主家は、仕方なく桜尾城まで撤退を余儀なくされました。武田家が尼子経久の援軍を要請する間、大内軍は桜尾城と銀山城の間の城を次々に落としていき、桜尾城を完全に包囲、銀山城を狙うところまでやってきました。そして、大内義隆の初陣戦として、銀山城攻城戦が始まります。

ですが、銀山城は、50もの曲輪を持つと伝わる非常に堅牢な山城です。容易く攻略できるような城ではありません。実際、大内軍も様々な策を立てますが、未然に察知されて失敗に終わってしまったり、度々大内陣へ城からの奇襲攻撃を食らったりと、なかなか苦戦します。ついには毛利元就ら尼子・安芸武田派安芸国衆からも夜襲攻撃を受けてしまいます。この夜襲攻撃が痛手となったのか、そもそもこの夜襲攻撃が強力すぎて大した抵抗もできずに撤退せざるを得なかったのかはわかりませんが、いずれにせよ大内軍は1524年7月に、一旦立て直しを図るべく兵を引かせます。

しかし、尼子軍もこれ以上の大内軍の大規模な侵攻はないだろうと踏み、隊を解散させました。陶興房は方針を転換し、桜尾城の包囲を強めます。ついに友田興藤は折れ、桜尾城は開城、友田興藤は隠居となりました。続いて陶興房は、安芸から尼子軍を一掃させる動きに出ます。具体的には、亀井秀綱のいる鏡山城や、天野領、平賀領です。ここは詳しく話すと話がかなりややこしくなるため端的にまとめます。この頃すでに多くの尼子派安芸国衆の心は尼子から離れており(尼子経久の重圧に耐えられなかったなど)、尼子家臣でありながらも大内に通じているという国衆もいたほどでした。毛利元就です。

そのため、大内軍は互いに援軍を出し合えないように各城を追い込み、毛利には尼子派安芸国衆らに大内に下るよう説得させました。鏡山城の亀井秀綱は孤立し何もできなくなり、1525年、安芸からの尼子軍完全撤退という大内からの要求をしぶしぶ飲んで出雲に撤退したのです。

安芸武田・尼子軍も黙ってはいません。尼子軍は伯耆の全域を制圧し終えたところでした。武田光和は、鏡山城と桜尾城の陸路を分断し、さらに大内に下った天野家に攻め込む動きに出ます。これに対して陶興房は、尼子とも大内ともつながっている毛利元就に(毛利家と天野家は一揆の契りを結んだ間柄で、安芸武田と毛利家はいわば同盟関係)これを仲裁させることで対応します。

大内義隆は安芸武田攻めにしか参加していなかったため、大内義隆の初陣戦としては敗戦でしたが、結果から見れば安芸から尼子軍を追い出し、尼子派安芸国衆を少しずつ大内派に引き込めているという、勝利の結果であったということになるのでしょうか。

## 2. 備後を狙う尼子経久

安芸からは完全撤退となったものの、伯耆を手に入れた尼子経久の目は、備後に向いていました。すでに北備後は急速に勢力を拡大する尼子家の影響を受けるようになってきた国衆が多かったものの、南備後は未だ備後守護山名忠勝に従う国衆もそこそこおり、尼子家と敵対していました。陶興房はここに目をつけ、既に山名忠勝を大内派の大名として引き入れていました。大内軍は、この山名忠勝を担いで北備後の尼子傘下国衆を下らせる動きに出ます。

1527年、陶興房は、安芸から備後に渡り、ともに北備後国衆の江田隆連の旗返山城と和智豊郷の南天山城を包囲します。尼子軍もこれに対抗するべく尼子経久自ら備後に向かいますが、北備後国衆の頭とも言える甲山城の山内直通が中立の立場を貫き城に籠ってしまったため、早速足並みがそろわない状態となってしまいました。結局江田隆連、和智豊郷は、ともにあっけなく大内に降伏してしまいます。

大内別働隊は、江田隆連が元尼子家家臣だったことを利用し、尼子軍が拠点とするべく築城していた細沢山砦を難なく落とします(築城メンバーだったため、弱点を熟知していた)。細沢山砦を奪い返しに来た部隊を追い返し(細沢山の戦い)、細沢山砦で様子を見ることとします。尼子経久が合流した尼子軍も、この細沢山砦が見渡せる地にハチが檀城(すごい名前ですよね、誤字ではありません)を築き、そこで対峙となります。しかし、既に前哨戦とも言える細沢山の戦いで大敗しているため勝ち目は低く、もう11月であることから出雲からの補給が難しくなると考えた尼子経久は、備後山名家と和睦したうえで撤退を決めました。

陶興房は、尼子経久と決戦に持ち込むことなく備後全域を備後山名家に従わせ、大内派に引き込むことに成功したのです。

### 3. 安芸を諦める尼子経久と、安芸の完全統治に舵を切る大内義興

この勝利により、周辺国衆に大内派が増えてきたことから、毛利家はついに正式に尼子家から大内家に鞍替えします。過去の目覚ましい活躍や人並外れた謀将さなどから、安芸を束ねる国衆と認識されていた毛利元就を大内家はついに手に入れました。

大内義興は、備後を手に入れた今、安芸を一気に大内のものとする好機だと捉え、再び安芸武田家に攻め込む動きに出ます。しかし、尼子経久は、これ以上安芸や備後に出兵しても大内軍に大勝できる望みは薄く、それならば守護の力が皆無な備中・美作・因幡に侵攻した方が領土は手に入りやすいと考えるようになり、安芸武田家を半ば見捨てるようになってしまいます。

これに反対した尼子の将がいました。塩冶興久です。塩冶興久は、毛利家の縁戚の高橋家を動かし、毛利元就を騙し討ちしようと画策するのです。

そして1528年、再び大内義隆を大将とする大内軍が安芸武田家に攻め込み始めました。4年前と同じように、銀山城以外の支城は難なく落とし、銀山城の包囲に入ります。尼子経久の目は完全に東に向いていたこともあり、ほぼ安芸武田家は孤立無援かのように思われました。

### 4. 大内義興の死

しかし、大内軍は今回も様々な攻め方を試みるも悉く失敗に終わるということが続き、安芸武田家に

攻め込み始めてからわずか1か月ほどで、大内義興が病でこの世を去ってしまったのです。大内家の家督相続のこともあるため、これ以上戦を続けるわけにもいかず、またもや大内軍は銀山城攻略を諦め、撤退してしまうのでした。

尼子経久は70を過ぎても衰えません。大内義興の死により沈んでいる大内家に再び攻め込もうと企みます。石見銀山には塩冶興久を、そして出雲の国衆や新宮党らを備後に向かわせます。北九州では、再び少弐家、龍造寺家、大友家らが挙兵するなど、大内家は南の対応にも追われることになります。

そこで、大内義隆は毛利元就を動かし、安芸と石見の国境付近を有する高橋家に攻め込ませ、毛利元就は見事高橋家を滅ぼします。石見銀山も、新しい鉱山が発掘されたばかりであったため大内家も対策を万全にとって死守しており、この高橋家の滅亡により尼子方も石見銀山を攻めづらくなってしまったために、塩冶興久は石見から撤退します。これにより大内家は東の脅威が薄れたため、北九州に主力を移動させます。

## 5.大内と尼子の和睦

さて、章のタイトルを見て驚いた方も多いでしょう。ここまで散々戦ってきた両家が和睦するなど。しかし、これにははっきり理由があります。1530年に尼子領内で反乱が発生したのです。なんと、尼子経久の三男である塩冶興久が、杵築大社(現在の出雲大社)に担ぎ上げられ反乱の頭となったのです。杵築大社を敵に回してしまったことは、尼子経久にとって尼子家から領民の心が離れかねない一大事です。また、塩冶興久は大内や毛利に和睦と援軍を要請していました。そこで、尼子経久も大内に和睦と援軍を要請することで、大内家としては尼子家・塩冶家のいずれとも和睦するという選択をさせ、大内家が塩冶興久を味方に一気に尼子を倒すというシナリオに備えることにしたのです。大内家は北九州に、尼子家は塩冶興久の乱に対応し、その後因幡、美作、備中に主力を差し向けたいという目論見があったため、利害もかなり一致します。

結局大内義隆はこの尼子経久の狙い通りの返答を送ることになりました。尼子家・塩冶家の双方と和睦したというわけです。しかし、ここからの動きは、不利になった側を水面下で支援してこの内乱を長引かせようとしたという説や、(塩冶興久には幾度と石見銀山を狙われた過去があったこともあり)どちらかというとな子方を支持していたという説などまちまちです。

いずれにせよ塩冶興久は、大内家を正式な味方とはできませんでした。新宮党らの活躍もあり、尼子経久は1533年ごろには塩冶興久を出雲から追い出すことに成功します。その塩冶興久は、北備後国衆の頭であった山内直通が匿いました。

## 6.塩冶興久の乱の終結

大内家は、北九州攻略に難航していました(勢場ヶ原の戦い)。塩冶興久も1534年に備後で自害となり、塩冶興久の乱は完全に収束してしまいました。このことは、大内義隆にとって、まだまだ北九州にとどまりたいのに尼子側から和睦を破棄される可能性が出てきてしまった(大内と和睦を続ける理由がない)ことになり、ややまずい状況となっていました。その尼子家内では、尼子経久が尼子政久に続き2人目の息子を亡くしてしまったことにひどく悲しみ、塩冶興久の自害は山内直道の責任だと言い出し始めます。山内直通としては、尼子家から再三要請の入っている月山富田城登城に応じれば命はないし、かといって応じなくても北備後に攻め込まれる口実となってしまうし、どうしようもない状況でした。結局1536年の春、尼子詮久の軍が備後侵攻に向かい、北備後国衆らは次々と尼子に下り、山内直通もついに降伏することとなったのでした(降伏せずに出家し落ち延びたとも)。

## 7. 再び緊張状態となる大内と尼子

そのころ大内義興は、龍造寺家兼を味方に引き入れ、少貳資元を降伏させたことで、あとは大友家を片付ければ北九州は一旦落ち着くといったところまでに至っていました。また、帝から、西国では最も上の従四位下大宰大弐に叙任されたことで、九州で大きな存在感を示すことができるようになったのです。そこで、大内義興は、北九州の戦線から一部の将を安芸に返し、尼子の動きを注視させることにしました。その尼子は、備後山名家従属国衆の切り崩しにかかっていました。まだ尼子家は大内家と戦うのは避けたかったため、なるべく大内家を刺激しないように備後国衆を切り崩していったのです。その備後山名家では、家臣杉原理興が当主であった山名忠勝を追放し、自ら山名姓を名乗るという政変劇が起きました。とはいえ、過度に備後に攻め入るのもそれはそれで大内を刺激しかねません。新たな当主となった山名理興の悪評を備後中に流すにとどめ、尼子詮久は美作や備中、備後に軍を向かわせることにしたのでした。一方北九州では、幕府の仲介で大内家と大友家の和睦が成立し、大内義隆の目は再び尼子に向こうとしていたのです。

## 8. 再度大内と尼子が対立関係に

この頃、尼子経久は嫡孫尼子詮久に家督を譲り隠居しました。その尼子詮久は、1537年から1538年にかけて、山陽方面に大規模な出兵を実施し、なんと美作・備中・備前を平らげ、さらに播磨国の一部も尼子領としました。これをもって、尼子家と大内家はほぼ同程度の領土を有することになったのです。西の憂いがなくなった大内家が尼子家を狙ってくるのは当然といった情勢であり、東側をある程度制圧した尼子詮久はいずれ再燃するであろう対大内戦で先手をとりようと考え、1538年の石見銀山急襲をもって、大内家への宣戦布告としました。尼子詮久は、東に遠征した後こんどは西にほぼ休みなく再び出陣するという行軍をよくやっていました。なかなか家臣泣かせですよこれ。これを受け大内義隆は、臨戦態勢に入ります。なお、備前・備中・播磨では、これを受けて尼子主力の目が西に向いている隙について反尼子連合が結成されてしまい、尼子詮久はこれへの対応が急務となり、対大内戦どころ

ではなくなってしまうのです。

## 9.吉田郡山城の戦い

1539年、ここまで大内家の軍師として活躍してきた陶興房が亡くなってしまいます。陶家の家督は、次男隆房が継ぎ、その陶隆房は、早速大内軍の大將として石見銀山の奪還に成功します。このことを受けて尼子になびいていた南備後の国衆は多くが大内家に帰参し、さらに武田光和が亡くなったことで、一時的に安芸武田家当主が不在となり、大内家にとっては追い風となりました。尼子詮久は、再び備中・備前を制圧し、播磨に攻め込んでいたのですが、この報を知り引き上げます。安芸武田家は、若狭武田家当主の武田元光から次男、武田信実を派遣してもらい、新たに当主として担ぎ上げました。安芸武田軍は再び草津城と水晶城を落城させ、これで大内 vs 武田・尼子の構図が復活することとなりました。今のうちに大内を叩いておかないと、後顧の憂いなく東に再び攻め込むことはできないと考えた尼子詮久は、ついに安芸侵攻に踏み切ります。大内家は、ひとまず毛利元就が離反してしまっただけで尼子詮久が難なく安芸武田軍と合流されてしまう(毛利領と安芸武田領が接しているため)ため、毛利元就を離反させないように、あえて証人の毛利隆元を毛利家に返したのです。証人を返してもらっておいでまで裏切るなんてことをしては、不敬極まりないと周りの国衆から思われるだけです。実際毛利元就は尼子家への帰順も頭をよぎっていたと思いますが、これを受けて大内派安芸国衆として抵抗する意志を意志を固めたことなのでしょう。

尼子軍は、ひとまず安芸の盟主とも呼ばれる毛利家を潰し、大内派安芸国衆の戦意を落とす策にでました。尼子軍は、30000もの大軍で、毛利家の居城、吉田郡山城に向かいます。尼子軍と毛利軍は、吉田郡山城にて川をまたいで対峙となりました。尼子軍は、幾度も攻城の機会を伺い兵を動かしますが、鎗分・太田口の戦いや池の内の戦いでの大敗など、毎度毎度毛利軍の奇襲を受け撤退となってしまい、打つ手がなくなっていました。まさに銀山城の戦いの構図に似ていますね。尼子軍は、家屋や畑を焼くなどして挑発をしますが、その挑発のために隊が散り散りになっていたところをまたも毛利軍につかれて局地戦を繰り広げられ(青山土取場の戦い)、この戦いでは大敗というほどではなかったものの、挑発の作戦は失敗に終わってしまいます。ここで、陶隆房率いる(毛利への)大内の援軍がやってきました。このことで、尼子軍は余計動けなくなります。

毛利・大内連合軍は、尼子軍の兵站路を徹底的につぶして兵糧攻めとし、尼子軍に本陣から打って出るしか選択肢のないように追い込みました。そして、ついに兵糧が尽きた尼子軍はその大半が吉田郡山城方面に出陣します。毛利軍はその尼子軍と必死に戦い、尼子軍を食い止めます。そしてその間、大内軍が兵の少なくなっていた尼子本陣に突っ込んだのです。尼子本隊は混乱に陥り、本陣を捨てることとしました。そもそも空腹な尼子軍ですから、本陣が落ちてしまったとなれば、兵は戦意を完全に失い、隊が瓦解するのは必定で、結局尼子軍は安芸から総退却することとなりました。こうして、大内・毛利連合軍は、見事尼子軍を安芸から追い払うことに成功したのです。この1540年から1541年にかけて

の吉田郡山城の戦い以降、吉田郡山城は誰にも攻められませんでした。

## 10. 安芸武田家滅亡

先ほど、「安芸武田は再び草津城と水晶城を落城させ、これで大内 vs 武田・尼子の構図が復活することとなりました。」と書きましたが、この話の続きをしましょう。時系列が前後しますがご了承ください。新たに安芸武田家当主となった武田信実でしたが、安芸武田家の実権は、武田信実とともに派遣された尼子家の重臣、牛尾幸清が握っていたのです。このことに対し不満のあった安芸武田家の家臣は少なくなく、家臣内で内乱が起こってしまうほどでした。家臣を束ねきれなかった武田信実は、指示に従ってこないことへの憤りからか己の無力さからか、安芸を去ってしまったのです。しかし、尼子軍が大内軍をも上回る兵力で安芸に攻め込む予定(吉田郡山城の戦いで撤退する軍)なのだと知った武田信実、尼子経久の説得を受けて安芸に帰ります。これにより、再び安芸武田家臣は一つにまとまりました。

陶隆房の隊は、吉田郡山城の援軍に向かったため、安芸に残っていた大内軍は多くはありませんでした。この期を逃すまいと、武田信実・友田興藤は、村上水軍を味方につけ、桜尾城・厳島を奪うことに成功します。ここまで滅亡まで秒読みかと思われるほどにまで衰退していた安芸武田家でしたが、なんとここにきて厳島を奪取したのです。...と思ったのも束の間、なんとちょうど同じタイミングで尼子詮久が安芸から撤退してしまいました。尼子軍は毛利攻めのための隊ではなく、安芸武田家の援軍として向かってきていた軍ですから、ここにきて安芸武田軍は孤立してしまったのです。筑前の大内船団が厳島に向かってきたことで、厳島に入ったばかりの友田興藤は、やむを得ず厳島から撤退することとなりました。こうして、一瞬で大内家は厳島を奪還したのです。

吉田郡山城の戦いで尼子軍と戦っていた陶隆房が安芸に帰ってくることは必定であり、戦意を失ったからか、当主を務めることへのやる気を無くしたからか、武田信実、友田興藤は再び安芸を去ってしまいました。今度こそは武田信実が心変わりをして安芸に帰ってくるなんてことは考えられず、安芸武田家の家臣団はまたもや瓦解しようとしていました。安芸武田家の当主は、武田信重が継ぎました(父が誰かすらいくつも説があり、伴家出との説もある)が、求心力は低く、安芸武田家を再びまとめあげることはもはや不可能でした。友田興藤が詰める桜尾城も、城兵のほとんどが抜けてしまったほどで、これを知った陶隆房は桜尾城への総攻めを行い、ついに友田興藤は自害して果てました。さらに、東からは毛利ら大内派安芸国衆が銀山城に攻め込みました。いくら難攻不落の銀山城とはいえ、大内義隆の銀山城攻めの時とは大きく異なり守兵が圧倒的に不足していたことから、毛利軍は難なく銀山城を攻略することができ、武田信重も自害して果てました。こうして、安芸武田家・厳島神主家はともに滅亡となったのです。武田信実・友田興藤の厳島奪取と安芸武田家・厳島神主家滅亡はともに1541年であり、なぜ安芸武田家再興からすぐにこうもあっさり滅亡してしまったのかと不思議になってしまうほどです。

## 11. 割れ始める文治派と武断派

吉田郡山城の戦いでの大敗により尼子を離反する国衆が出てくる中、1541年に82歳で尼子経久が亡くなってしまいます。この時代の人としてはとてつもなく長生きですね。これによってついに尼子家は衰退がはじまるかと思われましたが、ここでなんと尼子詮久は將軍足利義晴からの偏諱を受けたのです。これは、尼子経久が当主の時代は下剋上の悪党と言われてきた尼子家がついに將軍に認められたことを意味しており、尼子詮久、改め尼子晴久はこれを好機と捉え、再び美作への侵攻を企てます。しかし、今回は問題がありました。東石見や西出雲の国衆がこれに従軍しないと言い出したのです。それどころか、尼子派から大内派に寝返る国衆まで現れ始めます(備後山名家・山内家・吉川家など)。これでは美作攻略ですら難航するどころか、出雲が空になっている隙を大内軍に一斉につかれ、美作侵攻に従軍しなかった国衆が一気に大内に鞍替えしてしまったとしたらあつという間に月山富田城まで迫られてしまいます。大内義隆も従三位の位階を手に入れたことで、引き続き大内家も西国内では高い権力を有していたため、尼子晴久の將軍からの偏諱どころでは大内家臣の全く心は揺らいでいませんでしたし、完全に大内家優勢の構図がいつの間にか完成してしまっていました。

しかし、この頃から大内家内では、文治派と武断派で割れていました。陶隆房ら武断派は、これについで、大内主力を動員し一気に尼子家を滅亡に追い込むべきと考えました。しかし、相良武任ら文治派は、石見や安芸の完全統治がなせていない今、慌てて尼子攻めをする必要はなく、するにしても、大内派安芸・備後国衆らに任せておけばいいと考えました。そもそも出雲府中への深入りは危険だと考えていたかもしれません。この頃から文治派と武断派の対立は始まっていたのです。一旦は文治派の意見が採用された形となりましたが、大内義隆も、今まで攻められる一方だった尼子家を一気に滅ぼせる好機となれば、この機を逃してはならないとも考えたようになったため、結局文治派の意見(慎重にいくべき)を採り入れつつも、武断派の意見が採用されることとなりました。

こうして、大内義隆は、養子であり嫡男の大内晴持も引き連れ、出雲遠征をすることとわたのです。

## 12.運命の第一次月山富田城の戦いへ...

年が変わった1542年、大内軍は尼子討伐を掲げ30000とも言われる大軍で出雲に向かいます。しかし、その道は細いということもあり、ある程度先鋒隊が進軍するまでは、大内義隆の本陣は安芸から動かさない方針となっていました。大内先鋒隊は、最初の攻略地として、備後・石見・出雲の国境付近にある赤穴城を狙いますが、ここで手こずってしまいます。城主赤穴光清を討ち、なんとか赤穴城を落とすことには成功しますが、吉川興経が命にしっかり従わなかったことや、途中西石見衆の合流が遅れたことも響き、ここまでに約半年を要してしまったのです。

しかし、赤穴城を落としてからは、あまり大きな合戦に発展することもなく、陶隆房率いる先陣隊は西出雲を制圧してしまいます。塩冶興久の乱のきっかけの一つに、出雲の寺社仏閣が尼子家に虐げられていたという経緯があったことからわかるように、本音を言えば尼子家には従っていたくないと考えていた寺社仏閣は多く、大内軍は大いに歓迎されました。太平洋戦争でのインドネシアみたいな感じ

ですね。大内軍はいわば植民地解放軍です(?)

大内義隆は杵築大社(出雲大社)にて盛大に戦勝祈願を執り行い、ついに尼子の居城、月山富田城に迫ろうとしていました。この際も大内軍の動きは素早く、宍道湖沿岸一帯を大内軍は一気に制圧しました。尼子晴久は、どんどん計画が崩れていき(赤穴城を落としてからの大内軍の動きがあまりにも早く、準備が間に合わなかったなど)、ついには月山富田城での籠城しか選択肢が無くなっていたのです。

1543年になり、再び大内軍は動き出します。安来港を奪い、ついに出雲の8割ほどを手中に収めます。そして、月山富田城そばまで迫り、大内軍は本陣を置きました。両軍の兵力といい、城の周辺の雰囲気(堅城かつ山城)と言い、どこか吉田郡山城の戦いと同じようなニオイがするのですが... まあ、大丈夫ですよ。

### 13.大内軍、大敗

大内軍は徹底的に挑発を行います、尼子軍はまったく城から出てきません。尼子晴久にはとある狙いがあったのです。将軍足利義晴は、尼子家にできれば滅亡しないしてほしいと思っていました。なぜなら、西国の大名で上洛する兆しを一番見せているのは尼子家であったからです(一時期播磨の一部まで勢力圏としたため)。そもそも尼子家当主の尼子晴久は、自らが偏諱した人だというのもその理由の一つかもしれません。足利義晴は、大内家と尼子家の和睦を望み、両陣営に御内書を送ります。大内義隆は、これを拒絶。尼子晴久は、この大内義隆の反応含め、この御内書をうまく利用しようとしていました。

大内軍は、ひとまず力攻めの策に出ます。毛利元就が月山富田城にいたことがあるため、大内軍は城のつくりをある程度把握しており、うまい形で弱点をつきやすかったのです。しかし、新宮党の奇襲により混乱を起こし、撤退となってしまいます。吉川興経の軍規違反のせいと考えられています。この後再度攻め込みますが、またも新宮党にしてやられ、撤退に追い込まれます。

大内義隆は、尼子家を滅ぼし、吉川興経に隠居も視野に入れた重い罰を下すことをここで決めました。赤穴城攻めの時もそうですが、吉川興経は非常に態度がわるいようで。しかし、これを受けて吉川興経は、これ以上大内陣営にいても自分の居場所がなくなるだけだと悟り、尼子家に寝返ることを決めたのです。最後までド畜生な奴でしたね。これに呼応して、元尼子派出雲国衆の中には大内軍から尼子軍に寝返るものが現れはじめます。

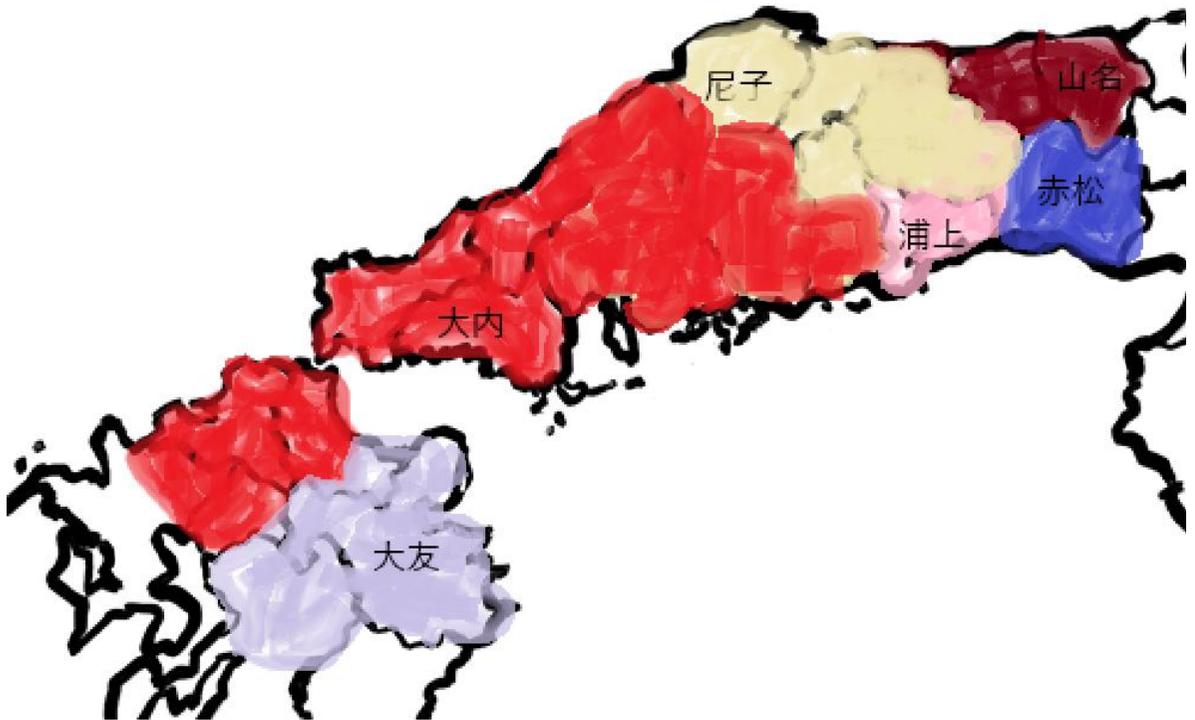
そうして大内軍が手をこまねいている頃、尼子晴久の御内書を用いた策がはまり始めます。そもそも、尼子家は領民にとっても厳しいのですが、とはいえなんの前触れもなく攻め込んできた大内軍をよくも思っていないのは事実で、これを尼子晴久は利用しようとしていたのです。大内義隆は、将軍の命を拒絶したという事実を広め、領民を煽動しようとしていました。尼子家も尼子家で大内領に何度もなんの前触れもなく攻め込んでいるわけですが、そんなことは領民は知ったこっちゃありません。理不尽かもしれませんがそういうものです。

大内軍は、領民から反感を買われたため、出雲制圧を断念し、御内書通り尼子家と和議を結ぶという方針に切り替えました。尼子晴久は、これで尼子家滅亡を逃れることができよかったです... などと思っているわけではありませんでした。大内軍が出雲からの総撤退のため、撤収の準備を行い、兵らも油断しきっているところを一挙に叩き、そのままどこまでも追い討ちしてやろうと考えたのです。尼子晴久は、和睦など結ぶ気は一切なく、大内軍が無防備になっているところを叩き、大内義隆・大内晴持を一挙に討ち取ることを最初から狙っていたのです。

このやり方は織田信長の桶狭間の戦いにかかなり似通っています。桶狭間の戦いは様々な説があり、今もその真相は謎に包まれています。いずれの説でも今川義元が織田信長を侮りきっていたことが大きな敗因となっていることに変わりはありません。織田信長は、尾張がどんどん今川家に攻め込まれている状況でもろくに軍議を開かず舞を踊ってばかりという逸話が残っていますが、私はこれは今川義元を油断させるためにわざとしていたことかもしれないと思っています。油断のさせ方は大きく違えど、油断しきったところを一気に叩き、一挙に大将首を狙おうという作戦のカタチは同じです。

さて話を戻しましょう。尼子軍は、一斉に月山富田城から打って出ました。月山富田城は山に囲まれた地形であることから、山道を抜けて(もしくは道なき道をひたすら進んで)撤退するしかないものの、それゆえに同時に多数の兵が撤退することはできません。そして地の利を知り尽くした尼子軍は、迂回路を駆使して大内軍を至るところから襲撃します。殿は精鋭揃いの大内派安芸国衆が務めましたが、沼田小早川正平や杉隆宣といった主要な国衆が討死する被害となりました。毛利元就・隆元も瀕死の状態でしたが、渡辺通ら多くの家臣が身代わりとなり、命からがら吉田郡山城の戦いまで撤退することができました。そして大内義隆の本隊ですが、大内義隆・晴持と一緒に撤退すると、尼子軍の追手がせまってきたり、道中で落ち武者狩りにあったりしては(明智光秀のような亡くなり方)二人とも亡くなってしまい、大内家はとんでもないことになってしまうと考え、大内義隆と大内晴持とで異なるルートをとって撤退することとしたのです。落ち武者狩りにあう可能性が極めて低いのは海路(中海)を辿るルートであるとし、大内晴持が海路、大内義隆が陸路から撤退することとしました。大内義隆はなんとか周防山口まで撤退できました。しかし、大内晴持は水難事故で亡くなってしまったのです。陸路に比べて安全と考えられた海路を辿った大内晴持だけが亡くなるという、とんでもない事件となってしまいました。

嫡男を亡くした大内義隆は、ひどく悲しみます。この後、大内家はどうなるのでしょうか...



↑ 第一次月山富田城の戦い直後の大体の勢力図です

### 3章 公家・大内義隆の生涯

ここまでは主に大内家の軍事行動について話してきましたが、ここからはやや話の雰囲気が変わってきます。ここからの大内家の内情が、大寧寺の変へと繋がっていきます。ぜひ最後までご覧ください。

#### 1. 第一次月山富田城後の大内家

第一次月山富田城の戦いでの大敗を受け、大内家内では大きく分けて2つの異変が生じました。1つ目は、文治派と武断派の明確な対立、2つ目は、大内義隆の戦意の減少です。

まずは1つ目の文治派と武断派の明確な対立についてです。2章の後半で少し触れた文治派と武断派の対立は、このタイミングで表面化します。もともと大内義隆自らの遠征に反対していた文治派の將たちが、この大敗を受けて武断派に対して強く憤りを感じたわけです。陶隆房はこの大敗を受けて猛省していましたが、それでも陶隆房のせいで大内晴持が亡くなったのだと考える文治派の將は多く、陶隆房は様々な將に嫌われていくことになります。

次に2つ目の大内義隆の戦意の減少についてです。もともと大内義隆は、尼子晴久には遠く及ばないものの戦意は比較的高めでした。そのため、武断派の陶隆房らの発言権が大きかったと考えられます。し

かし、嫡男大内晴持の死は大内義隆を大いに悲しませました。大内義隆は引き籠もり、政治から離れるようになります。これは大名ではありませんが、北条家に長く軍師として仕えてきた北条幻庵も、自らの嫡男(北条時長)が亡くなった際は、数年間箱根に籠り続けてしまい、北条氏康にとってはかなりの痛手となってしまったということがあります。この例では、別に大名が引き籠るようになったわけではないですし、そもそも北条氏康自体非常に優秀な将なので、さほど大きな問題にはなりません。しかし、今回は名門大内家の大名がそのような状態に陥ってしまっています。これは家臣たちにも大きな影響を与えました。結局大内義隆は再び政治の表舞台には帰ってくるものの、その頃にはもう戦意はほぼ0に等しく、完全に文治政策へと舵を切っていました。このことから、大内家内では文治派の発言力が強くなっていき、陶隆房ら武断派は追い込まれていきました。

そして、大内晴持に新たな大内家後継者として、なんと大友義鑑の次男が候補に挙がったのです。大内家にとって今何より危惧しているのは、筑前や豊前の大内派国衆の動揺に便乗した大友家の北上でした。何度も申し上げていますが、大内家にとって博多港は生命線です。大友家に奪われることなどあってはなりません。また、大友家も、肥後守護を手に入れたものの、国衆らの反発は強く、鎮圧に時がかかっていたことや、薩摩から島津家が北上してくる兆しがあったことから、南九州にも目を向けなくてはならなくなっていました。両家の利害は一致し、完全に大内家と大友家は和睦する形で、大友義鑑の次男が大内義隆に猶子入りしました。將軍足利義晴はこれに喜び、偏諱を与えて大内晴英と名乗らせました。

## 2.再び京の情勢が不安定に

1章で軽く触れた一度は大内義興と連合政権を築いたものの、1531年の大物崩れによって自害してしまった細川高国でしたが、高国派の残党はまだ細川晴元に抗っていました。そのうちの一人に、細川高国の養子であった細川氏綱という人物がいました。細川氏綱は打倒細川晴元を掲げ、過去になんども挙兵していたのですが、1544年頃になると、この軍事行動が活発化してきます。しかし懲りないですよ、細川家の人たちは...

そのため、この頃、帝と將軍の仲裁で、大内家を正三位に叙任する代わりに京での混乱を鎮めるよう働きかけること、そして尼子家は再び上洛を目指し山陽方面に攻め込んでいくことを条件に、大内家と尼子家が停戦状態となったと言われています。西の大国同士で争われても京にとって何もメリットはないですし、それなら官位の高い大内家には細川家の仲裁をしてもらい、力の高い尼子家には万が一に備えて上洛への道を切り開いてもらおうとしたわけですね。これは、なるべく戦いたくない大内義隆にとっても、再び東に目を向けたい尼子晴久にとっても嬉しいことでした。

## 3.おさいの方、懐妊...?

おさいの方とは、大内義隆の継室です。もともとの正室であった貞子(!?)と不仲であったことから、新たに大内義隆に嫁いだとされています。ですが、大内義隆はおさいの方とは京遊びしかしておらず、妊娠などさせた記憶はないと言うのです。おさいの方は、大内義隆に睡眠剤を飲ませるなどして、大内義隆に知られない状態で... なのかもしれません。大内家重臣らは、建前上は大内義隆が実子を授かったことということにはなるものの、そもそも大内義隆の子なのかというところも含め、おさいの方には疑惑がかけられ、喜びと不安が入り混じるようになりました。

#### 4.陶隆房、一度目の反乱

そして1545年、ついに大内義隆の実子が生まれてしまったのです。大友家からの猶子である大内晴英は、大内義隆に実子が生まれたら大友家に返すという取り決めであったため、約束通り大内晴英は大友家に返され、再び大内家と大友家は不仲となってしまいました。これにより、南の憂いが生じてしまいます。たださえ大友家は強いのに、戦に非常に消極的となった大内義隆がこれに対抗できる力を有しているかと言われれば、なかなか厳しいところです。このことに強く憤りを覚えた将がいました。陶隆房です。

陶隆房は、このままでは博多港が危うくなるし、あとから実は大内義隆の子ではないなど判明してしまえば、大内家内が混乱に陥り、滅亡に至りかねない、そう考えたのです。文治派の筆頭で、以前より陶隆房と非常に仲が悪かった相良武任に(この生まれてきた子供について)真実を吐かせてやると、陶隆房はついに挙兵してしまったのです。相良武任は吉見正頼に庇護され一命をとりとめるものの、陶隆房には重い処罰が下ることとなります。幸いにも、大内家内が二分するような大戦に発展することはありませんでした。

#### 5.神辺合戦

本章ではほぼ戦の話はしないつもりでしたが、これだけは話しておかなければなりません、神辺合戦です。もともと神辺合戦は1543年から始まっていました。備後山名理興が、第一次月山富田城の戦いを受けて尼子派に転じたタイミングで、沼田小早川正平が第一次月山富田城の戦いで亡くなったことによる小早川家内の混乱に乗じ、一気に小早川家を滅ぼしてしまおうと企みますが、大内派安芸国衆に徹底的に対策されており、領土を増やすどころか、居城・村尾城付近しか領有しないほどに勢力を弱めてしまいました。しかし、先述した大内家と尼子家の停戦により、大内家の侵攻は中止となり、滅亡は免れていました。

しかし、大内義興と尼子経久の和睦の時のように、いつまでも大内家と尼子家が敵対関係になるかは全く読めません。再度対立した時に、備後山名家が尼子派であるようでは、なにかの支障をきたすことは必定です。そのためにも、大内家としては早めに備後山名理興を倒しておき、大内の息のかかった人に備後山名家の家督を継がせておきたかったのです。

謹慎中とはいえ、陶隆房は大内家内一の軍才の持ち主と言って過言ではありません。十分反省していることですし、ここは陶隆房に武功を稼がせて、再び評定衆に戻してやろうということで、1548年の2度目の備後山名攻めの大將は陶隆房が務めました。陸地での初戦では大敗するも、その後の水軍を用いた海からの侵攻は成功するなど、一進一退の攻防が続きました。しかし、今度も村尾城を落とすには至らず、大内義隆の命により撤収となってしまいました(先述の通りこの侵攻にはあまり時をかけたくなかったため、時間切れといったところです)。

結局、この後1549年に大内派安芸国衆のみで村尾城を攻めることとなり、備後山名理興は備後を捨てて出雲に落ちていくこととなります。これをもって、実に6年にも及んだ神辺合戦は終了したのです。このように、第一次月山富田城の戦いののちは、大内家の軍事行動が完全になくなったというわけではなく、大内義隆自ら出陣することがなくなったというだけなのです。実際ここだけでなく、北九州でも再び反抗してきた少弐家を滅ぼすなど、大きな軍事行動には出ていたのです。

## 6. 陶隆房を遠ざける文治派

さて、村尾城を落とすに至らなかった陶隆房は、再び居城で蟄居となってしまいました。もう一度目の陶隆房の反乱から5年は経とうとしていますが、未だに評定衆へ復帰できていません。これは、大内義隆が怒っているというよりかは、陶隆房のやり方が気に入らない相良武任や冷泉隆豊ら文治派が大内義隆に告げ口しているからという方が正しいかもしれません。武断派の代表ともいえる陶隆房が(神辺合戦での1年間を含め)5年も蟄居しているのですから、大内家内は完全に文治派が牛耳っているのは必然といったところなのです。

この頃から、陶隆房は本格的な謀反を企て始めたと考えられています。村尾城を落とし後の安芸や備後の配属は(大内派安芸国衆を除き)文治派により固められ、陶隆房の居城にほど近い桜尾城に大内家の重臣弘中隆兼が移されたことから、大内家としても警戒の姿勢を強めていたのでしょう。

また、ここまで「大内派安芸国衆」と書いてきた国衆らは、半数以上が毛利家の傘下のようになっていきます。数々の問題を起こしてきた吉川興経が幽閉されてからは、毛利元就の次男毛利元春が吉川家を継ぐことになりましたし、沼田小早川家当主不在の混乱については毛利元就の三男毛利徳寿丸が(沼田・竹原を統合したうえで)小早川家を継ぎましたし(小早川隆景と改名)、その他天野家、宍戸家、香川家、出羽家や熊谷家なども実質毛利家傘下の国衆のような位置づけとなっているからです。これ以上毛利家に力を持たせすぎるとよくないだろうという判断もあったのかもしれません。

## 7. 西の小京都、周防山口

本章第2節で触れたことについてですが、結局危惧していたことが起こってしまいました。細川氏綱派の三好長慶が1549年に細川晴元派の三好之長を討ち取ると(江口の戦い)、細川晴元は摂津から逃亡し、将軍足利義藤(後の義輝)も御所を近江坂本に移すこととなってしまったのです。この後三好長慶により細川晴元派の将は畿内から排除され、細川氏綱が新たに細川家の頭となったのです。いわゆる三好政権の誕生です。

三好長慶が最初の天下人と称されることも多いですが、その通りこの時の三好長慶の権力は絶大でした。このため、帝を支えるはずの公卿すらも京を離れて逃げ始めてしまったのです。その先は、奥州の伊達家、駿河の今川家、越前の朝倉家、そして周防の大内家といったところでした。中でも最も避難先として選ばれやすかったのは大内家でした。奥州はまだまだ不安定ですから、避難先としては心もとないところですが、今川家は(松平広忠を亡くすも)三河をほぼ平定し、いよいよ尾張制圧へと躍起になっている頃だったため、まともに匿ってくれるかは分かりません。そして朝倉家の越前は近江に接しており、何が起きるか分かりません。そうなってくると大内家を頼るのが一番安全で聡明な選択だったでしょう。

大内義隆は、公卿らを歓迎します。彼らに贅沢三昧な暮らしを与えたほどです。しかし、大内家を頼れば贅沢に暮らせるという噂を聞きつけた公卿らがさらに周防山口に逃げ込みます。先述の通り大内家はもともと逃げ込む先として最も有力であったことも相まって、周防山口に逃げ込む公卿の数は日に日に増す有様だったと言います。人が増えすぎるとは金もかかります。京屋敷もどんどん建てられていきます。大内家は、財政難に陥ろうとしていました。民には重い税を課し、さらには博多港での交易で得た利益もこの公卿の贅沢のためにつぎ込むほどでした。

とはいえ、その分山口は栄えていき、大内義隆は山口に遷都するという並外れた計画まで練り始めます、

## 8. 陶隆房の思惑

大内家からの重税に喘ぐ民の声は、陶隆房の耳に届きました。陶隆房は、公卿の贅沢のために民を苦しめるという大内義隆のやり方に不満が差していったのです。武断派である陶隆房は、大内家は従二位まで上り詰めたとはいえ、あくまで武家なのだから、公卿ではなく領民のことを第一に考えるべきだと考えていました。別に逃げてきた公卿は匿う程度でよく、大内家の財政を圧迫するほど優遇するなん愚かなことだと思っていたわけですね。

しかし、公卿に贅沢をさせるという方針を立てたのは大内義隆ではあるものの、細かい調整をしていたのは相良武任や冷泉隆豊ら文治派が主であり、大内家の財政状況(重税を課していること含め)を大内義隆が把握していたかは微妙なところ。とはいえ、大内義隆が完全に文治政策に切り替えていたことは間違いないでしょう。大内義隆の心はもはや貴族であり、京が山口に移れば幸せが確約される、民への重税はそれまでの辛抱だという考えに至っていたはず。その考えのままでは大内家は危ないという陶隆房の考えに賛同する大内家重臣も数多くおり、文治派と武断派との間ではもはや埋めることのできない溝ができてしまいました。

陶隆房もはじめは大内義隆には隠居してもらい、その嫡男の亀童丸(例の疑惑の子)に家督を継がせるという程度しか考えていなかったようですが、陶隆房の狙いはエスカレートしていきます。ついには、大内義隆、並びに亀童丸を討ち、大友家から再び大友晴英を呼び寄せて、大内晴英として大内家当主とさせるという、完全な謀反行為を企てるようになっていました。

## 9. 味方を増やすべく動く陶隆房

そのころ大友家内では大事件が起こっていました(二階崩れの変)が、大友義鎮が家督を継ぐことでひとまずはまとまったものの、まだまだ家督相続の件では揺れていました。このことを陶隆房は利用しようとしたのです。大友晴英を再び使うというのは凶々しいですが、大友義鎮が自らの当主の立場を盤石にしておくためには大友晴英が自領にいない方が好都合であるというため、この条件(大友晴英を大内家に移すこと)は飲んだ方が身のためだろうと、大友家の足元を見るような交渉をすることができたのです。

陶隆房と大友義鎮の間では、博多港含め北九州を切り取り次第大友領としてよいという取り決めが交わされ、大友義鎮はこの謀反に加担することを決めました。北九州の杉家は陶隆房を毛嫌いしているため、この反乱には参加しないと陶隆房は考えていました。それなら、大友家の北進軍に杉家を当たらせれば、あっさり博多港を大友家に奪われることもないし、杉家が陶隆房を救いに動く余裕がなくなると踏み、この条件を提示しました。なかなか賢いですね。

そして、陶隆房は軍事面でも動いていました。陶隆房の兄、問田隆盛を動かし、石見銀山を奪還させたのです。尼子主力は美作に向いており、西出雲では大廻党の尼子豊久が討たれた(橋津川の戦い)ことの余波により西出雲の大社でよからぬ動きが起きていたため、石見銀山は手薄だったのです。

これは大内家と尼子家の停戦を破る行為であり、当然許される行為ではないのですが、これは陶隆房

にとって大内義隆を公家気取りから目覚めさせる最後の手段だったのです。しかしついに叶わず、陶隆房は再び軍規違反の罪で居城での蟄居を命じられてしまうのです。

さらに陶隆房は、毛利元就に安芸は切り取り次第毛利領とする条件で毛利家(大内派安芸国衆)を味方に引き入れ、さらには民を苦しめながらもエスカレートしていく大内義隆の文治政策を受けて大内家から心が離れていた内藤興盛も味方に引き入れました。内藤興盛は、大内義興のころから大内家に従っていた忠臣だったのですが、これはあまりにもやりすぎだと考えるようになったようで、大内義隆には呆れ果て、陶隆房の考えに次第に賛同するようになっていたのです。こうして、もともと陶隆房を毛嫌いしている相良武任、冷泉隆豊、吉見正頼の弘中隆兼、杉興運、菅田宣真らを除いた、主要な大内家家臣・従属国衆はほとんど味方に引き入れることに成功します。

陶隆房は、1551年の8月28日(旧暦)に挙兵すると宣言します。この宣言には様々な意図があったことでしょう。陶隆房自身、大内義隆にはお世話になったため、本当はこんなことなどしたくないのです。公卿にここまで優遇するのをやめて、今まで通り武家らしくある大内義隆を期待していたのです。自らを犠牲にしてでも(2度目の反乱を公言するなど、普通に考えて死罪レベルです)、この願いを訴えようという固い意志があったのかもしれませんが、しかし、大内義隆は陶を疑うことも、対策を講じることもなく、平然としていたのです。陶隆房は完全に失望しました。勢力拡大に躍起だった頃の大内義隆は、二度と帰ってこないのだと...

## 10.大内義隆、自害

陶隆房はついに2度目の反乱に踏み切ります。1度目とは異なり、今度は本気で大内義隆を倒しに挙兵しています。事前に毛利軍らに西安芸と厳島を奪わせて東を固めのち(銀山城の吉原次秀、桜尾城の弘中隆兼らは降伏)、陶隆房の本隊は出陣します。

冷泉家の館、防府館を落とし、大内館に迫ります。城下は大混乱に陥りました。無防備な大内館では防衛に適していないと判断し、大内義隆は冷泉隆豊、右田隆次らを連れて、近くの寺(法泉寺)に逃げ始めました。

陶隆房ら反乱軍は、大内館に攻め込みます。陶隆房は、大内義隆の考えをあそこまで捻じ曲げてしまったのは逃げ込んできた公卿らなのだと考えていたことから、公卿の残る大内館に攻め込むことなど全く躊躇しなかったのです。むしろ、「義隆様をあそこまで滅茶苦茶にしゃがって!!」という怒りを込めて攻め込んだかもしれません。反乱軍は容赦なく公卿が蓄えた金銀財宝を根こそぎ奪い取り、抵抗する公卿はなで斬りにしました。その中には、権中納言の持明院基規や、元関白の二条尹房、元左大臣の三条公頼といった名高い者も含まれていました。

法泉寺に逃げ込んだ大内義隆ですが、劣勢を悟るや否や兵がどんどん逃げ出し、もはや戦えないほどとなってしまう。大内義隆は寺を捨て、日本海沿いへ、山の中を逃げていきました。どこかしの港につければ、あとは萩まで船で移動して、吉見正頼の治める領土まで逃げ込めるはず。義隆ら一行は、丸一日ほど逃げ続け、ついに日本海に出ました。そこは仙崎の港(長門市)でした。しかし、雨が強く出航を断念することとなります。天も大内義隆を見限っていました。

結局一行は、仙崎の約7km南にある大寧寺に庇護され、夜をそこで明かしましたが、反乱軍は、村人らの密告により、大寧寺に押し寄せ、寺を取り囲みます。

結局、大内義隆は自害となり、寺から逃げ出していた亀童丸も見つかり、陶隆房の前で斬首となりました。

た。

大内義隆は最期まで付き従った冷泉隆豊や右田隆次らは、大内義隆の自害を見届け後、反乱軍に斬りこみ、討たれました。その翌日、筑前花尾城に逃げ込んでいた杉興運や相良武任らを、内藤隆世(内藤興盛の孫)らの隊が花尾城に攻め込み討ち取りました。また9月には、安芸に残っていた平賀隆保や菅田宣真を、毛利元就らの隊が槌山城に攻め込み討ち取りました。これにより、吉見正頼を除く文治派の将はほとんど悉く討ち取られ、大寧寺の変と呼ばれる陶隆房の2度目の反乱は大成功を収めたのです。

## 11.その後の大内家

この後手筈通り大友晴英が再び大内家に派遣されました。陶隆房は大内家の家宰となり、大内晴英の偏諱を受けて陶晴賢と改名します。その大内晴英も、将軍足利義藤から偏諱を受けて大内義長と名乗るようになります。しかし、大寧寺の変にて公卿をたくさん斬ってしまったことから帝からは嫌われるようになり、将軍家も周防と長門の2ヶ国しか守護に任命してくれませんでした。大寧寺の変では陶方として貢献した毛利元就でしたが、大寧寺の変の後、安芸や備後のほとんどを実質毛利領とするまでに勢力が拡大していました。詳しいことは分かっていないものの、この頃から陶晴賢と毛利元就は徐々に対立していくようになり、1555年の厳島の戦いへと繋がっていくのです。陶晴賢や弘中隆兼が厳島の戦いで討ちとられただけでなく、陶晴賢の嫡男の陶長房や兄の問田隆盛も、なんと杉重輔に殺されてしまったのです。実は陶晴賢は(もともと仲が悪かった)杉重矩を警戒して誅殺していた過去があり、その子であった杉重輔はどこかで仇討ちをしたいと考えていたようなのです。これによって大内家重臣は内藤隆世しか残っていない状態となり、大ピンチとなります。実の兄である大友家からも見限られてしまい、大きな決戦に持ち込めることもなく周防や長門を毛利軍に制圧されていき、ついに名門大内家は滅亡することとなりました。

## 4章 大内家を文芸の視点から見る

最後に、大内家の文化的な側面を軽く話しておきたいと思います。

本章は、節で区切ることはしません。

大内家の居城であった周防山口の大内館は、途中でも触れた通り「西国の京」とうたわれるほど栄えていた地でした。現在の山口市は、県庁所在地ながら中核市でも施工時特例市でもない市となっており、山口県内では中核市となった下関市の方が栄えているような印象があります。また、現在新幹線も停まり、山口市の中心地となりつつある新山口駅付近ではなく、普通列車が毎時1本あるかないかというローカル線である山口線の上山口駅付近に大内館がありました。これだけ聞くと大内館の付近は現在はかなり寂れてしまったのかと思う方もいるかもしれませんが、現在も小京都の典型としてよく挙げられる地域なのです。これは、大内家がもともと京都を手本として街づくりをしていたことが由来です。京都という鴨川にあたる川がやたら細いかというツツコミポイントはあるのですが、地元民の方は自然と道を「上がる」「下がる」とおっしゃられるようで、まさに京都のような文化が根付いている

地なのでしょう。外国人の方にも人気な街並みなんですよ。

1章や2章の頃の大内家のところから振り返って、文化の面から再度見てみましょう。

大内義隆の2代前の大内政弘は、古典収集や古典研究に躍起でした。大内政弘は、文芸に長けた人を多数山口に呼び寄せていたのです。また、能楽を保護したり、雪舟をたびたび訪れていたりと、いかにも文化人といったような人でした。和歌会や連歌会、雅会などがたびたび行われていたようで、この頃から山口は小京都らしき雰囲気があったのでしょう。応仁・文明の乱で京都は荒れ果てていたので、京都のように栄えた山口に憧れる公卿は、この頃から少なくなかったはずですよ。

1495年になり、大内政弘が亡くなると、大内義興が大内家の家督を継ぎます。そして足利義尹が大内家を頼り周防に落ちてくると、より大内家内では文芸活動が活発化します。前將軍を奉じての歌会ですから、さぞ盛り上がったことでしょう。

そして大内義興は、足利義尹を擁して上洛し、細川高国と連合政権を築いている頃の約10年間、京にいたこととなります。この期間中に京での様々な文芸に触れたことは言うまでもありません。歌の道も極めていきましたし、猿楽や犬追物にも強く関心を抱いていたといいます。また、有職故実の研究にも励んでいました。大内家は、重臣にも文芸に長けた将が多かったと言われていました。みな主に従って、大内義興がしていたようなことを真似して各々文芸の道を進んでいったようです。詳しくは省略しますが、一人ひとりの文学への熱意を感じる逸話ばかりで、文芸界に名を残した者もいるなど、大内家家臣団は非常に教養が高かったことが感じられます。

この在京は、大内義興に大きな影響を与えたことでしょう。しかし、安芸で反大内の動きが起き始めたり、尼子経久が反抗しようとしていたり、領内問題が発生してきたため、大内義興は周防に帰ることとなります。

しばらくして大内義興が亡くなると、大内義隆が跡を継ぎます。この大内義隆も文芸に長けており、公家有職や武家故実を研究していました。大内家内に独自の作法が作られたほどで、大内義隆のもとで新たな有職故実が成立したと言えるのです。また、大内義隆は茶も嗜みました。もともと大内家当主は元来茶好きが多かったのですが、大内義隆の代で全盛期を迎えるのです。大内義隆は、唐物茶入の玉堂肩衝や瓢箪茶入、茶掛の江天暮雪など、茶湯に関する貴重な品をいくつか所持していたようで、茶への熱意がよくわかります。

また、大内義隆は神道にも熱心でした。第一次月山富田城の戦いの前哨戦の頃、安芸に本陣を置いていた大内義隆を吉田兼右が訪れ、唱え言葉の数々を教えたり、神道関係書を伝えたりしたそうです。驚くべきことに、大内義隆が月山富田城の近くに本陣を置いて尼子攻めに苦心している間も、吉田兼右は神道に関する様々なことを大内家のもとで行い教え、大内義隆とやり取りを交わっていたのです。大内義隆の神道への熱意を感じるエピソードですね。しかし、出雲からの撤退時に吉田兼右からももらったもののうちいくつかをなくしてしまったとされています。

ここからは3章で話したところとなります。周防山口は栄えていたとぼんやりした感じで言いました。もう少し細かく見てみましょう。

大内義隆が大宰大弐に任ぜられてからは、官位が父を上回っていったため、先代のように文化人としての側面も成長させていきたいと考えていったと思います。そのひとつとして、上洛して京文化に触れ

たいと思っていたのですが、逆に多くの公卿が山口にやってくるというなかなか想定外な展開となります。大内義隆としては、

上洛することなく、有力公卿らと京遊びをしたり、京文化に触れたり、歌道などをより極めたりできたわけですから、願ったり叶ったりです。大内義隆が山口に逃げ込んだ公卿らを破格の待遇で迎えたのも、このような理由があったからこそなのでしょう。大内義隆が公卿に贅沢三昧させたのも、ちゃんと理由があつてのことなのです。

ますます歌道に熱心になった大内義隆は、様々な歌集に名歌を残しました。山口に行けば歌道に非常に寛容な領主がいると聞いた一流連歌師は、こぞって山口を訪れることとなります。これら一流連歌師の活躍もあり、大内連歌は、もはや戦国時代の中心的存在でした。大内家は神聖な社のある厳島を支配下に置いていたため、そこで行事を行えば、京で行った行事かのように文芸人は注目し、非常に盛り上がったことでしょう。

また、大内義隆は儒学にも熱心でした。大内義隆は、当時の一流学者であった清原宣賢や小槻伊治らから、漢や唐の訓詁学、いわゆる古註を学んでおり、さらに四書や五経の注釈書である五経正義や、朱子の五経新註、時計の製法書などを求めるべく朝鮮に何度も使節を送るなど、非常に意欲的でした。朝鮮から五経新註を手に入れた大内義隆は、当時の儒学の主な二系統であった古註と新註の両方を学んでいたこととなり、幅広く学ぶ姿勢が見て取れます。また、近習や寺の幼僧などに四書や五経などを講義することもあり、彼らに教養を学ばせることも重点に置いていたものと思われます。当時の山口には、船で運ばれてきた経書類を扱う店もあったようで、大内館の城下町は儒教的雰囲気があったものと考えられているようです。

さらに、大内義隆は漢文や詩文の普及にも努めました。これは、これまでの大内家当主は行ってこなかった取り組みでした。これらの理解にはかなりの勉学を必要とするからかもしれません。ですが大内義隆は、東西各所から禅僧を呼び寄せ、経学詩文に刺激を与えさせたのです。

1550年、フランシスコ・ザビエルは山口を訪れました。しかし、一度目の謁見でザビエルが大内義隆に話した話は、大内義隆にとってなかなか聞き捨てならないものでした。一部切り取ってやや現代風に要約すると、「ホモなんでもってのほか。そんな大罪を犯す人は、汚らしい豚や畜生な犬よりも卑劣だ。」といったところです。大内義隆は男色を好んでいたとされる人で、陶隆房はその被害者として度々名前が挙がります。そんな大内義隆は当然のごとくこれを聞いて激高します。結局この時は基督教の布教は認めませんでした。

そこで、ザビエルは様々な土産を持ち込み二度目の謁見に臨みます。この際、ザビエルは大内義隆に「不思議の重宝」こと機械時計・オルゴール・老眼鏡・双眼鏡。望遠鏡をはじめとする様々な贈物を渡しました。大内義隆は見たこともない驚愕の品の数々に満足し、そのお礼として基督教の布教を認めたのです。山口に神父たちが住める寺を与えるなど、そこそこ優遇していました。ザビエルは大寧

寺の変直前まで大内領で布教に努め、その後は大友家のもとに向かっていきました。一時期、大内領には2000人ほどの信者がいるほどにまでキリスト教は発展していたようです。しかし、防長計略により大内家が滅亡すると、信者は減少していきました。

大内義隆は上洛こそ叶わなかったものの、「山口殿中文庫」と呼ばれる大内文庫は、様々な書籍で満たされていました。国文学では、源氏物語や伊勢物語にその注釈書、古今集をはじめとする勅撰和歌集、有職故実書、和歌・連歌懐紙などの数々など、詳しく書けば読むのが退屈になるようなレベルの量の書物を有していました。仏書や漢籍では、山口に唐本屋があったことですから、(具体例は先ほど挙げた通り)こちらも貴重な書物を大量に有していたことでしょう。

ここまで大内家で書物が発達した理由は、大内家当主が代々文芸へ強い関心を持っていたというだけではありません。

- ①周防は有名な紙の産地であることから、高い印刷技術を持っていたということ
- ②大内家は代々朝鮮や明と使節を送りあって貿易をしてきたため、異国人に触れる機会があり、——一回一目は——さ——お——き——、ザビエルが来訪した際も冷静に寛容な対応を取れた
- ③京からたくさんの公卿が逃げてきた(これは2章で話した通り)
- ④外国使節が文化を京都に伝えるべく、日本の西側から上陸し上洛を目指す際、大内領はその途中にあることから、京都よりも先に伝わった

このような様々な条件にも恵まれ、大内義隆は大内文化の最盛期を築いていったのです。北山文化と東山文化が融合してできたこの大内文化は、周辺地域にも波及していったことから、西国ではトップレベルで栄えていた場所であり、かつ西国の最重要都市であったことに違いありません。大内文化は日本の中央文化の流れに沿っていたこともあり、山口はまさに「西の京都」だったのです。

### <あとがき>

まさに大内義隆の代の大内家は、武家としても公家としても最盛期でした。とはいえ、武家としての大内義隆は、先代大内義興が遺した権力、そして陶隆房をはじめとする優秀な家臣たちに恵まれたからこそ大内家の最盛期を築けたわけで、大内義隆自身は凡将であると評されています。しかし、公家としての大内義隆は、ここまで何度も書いてきた通り、自らの実力も相まって文句なしで大内家の最盛期を築いています。

しかし、江戸時代になると、質実剛健を武士の本文とするものがあったので、大内義隆は文芸人に偏りすぎたことでお家を滅ぼしてしまった愚将という評価を受けてしまいます。俗にいう「戦国三大愚人」は江戸時代に定められた(?)ものなので、現代で大内義隆を愚人と評価する人はほぼいないでしょうが、

残念ながら戦国三大愚人の一人に数えられてしまったのです。今川氏真も同じです。あの朝倉アホ景さんですら選ばれなかった戦国三大愚人に選ばれてしまうなんて、不憫でなりませんね。

大内義隆という人物は、戦国大名でありながら文芸人であるという特徴から、一言では語りづらいものがあります。良く言えば西の京都を治める領主として、文芸に励み、日本の文化をリードした文化人。悪く言えば戦国大名として「領民を守る」という本分を忘れ、文化の発展のために必要な資金源を、領民に重税を課すことで補った悪徳領主。前者は文治派の解釈で、後者は武断派の解釈と言えると思います。もともと大内家家臣が文治派と武断派で割れていたこともあり、大内義隆の偏りすぎた文治政策が武断派の怒りを買うこととなり、反乱を招いてしまったのです。

戦国時代というのは残酷です。細川藤孝のように相当武芸にも優れていない限り、文芸に優れた武将や大名は基本沈没してしまう時代です。大内義興や、第一次月山富田城の戦い以前の大内義隆は、文芸に力を入れながらも、武芸や策略、謀略に優れた家臣とともに積極的に敵対勢力と戦っていたために、戦国大名としてしっかり成立していました。しかし、第一次月山富田城の戦いを機に大内義隆の戦意が喪失し、大きな軍事行動に出ることが極端に減ったことで、滅亡への道を辿って行きました。まさに戦国時代とはこういう時代なのだということを物語っています。

大内義隆は悪くない、ただ生まれてきた時代が悪かっただけなのだ... 私は思う次第です。

長くなってしまいましたが、最後までお読みいただきありがとうございました！

#### 参考文献:

米原正義『大内義隆 名将が花開かせた山口文化』戎光祥出版 2014年

藤井崇『大内義隆 類用武徳の家を称し、大名の器に載る』ミネルヴァ書房 2019年

<Wikipedia>大内氏,日明貿易,細川政権(戦国時代),三好長慶,陶氏,畠田氏,棚守房顕

<Youtube><https://m.youtube.com/watch?v=bG4Bt0lNq0l&pp=ygUKI-WMI-W3neauvw%3D%3D>

<https://www.youtube.com/watch?v=TM275kvAKfk&pp=ygUKI-WGHua6gOmZog%3D%3D>

[#1-#18](https://www.youtube.com/playlist?list=PLadS5jzd0StQ8GT9CjkmVEUcu5y-p_tmg)

<https://suoyamaguchi-palace.com/ouchi-yoshioki/>

<https://rekisi-daisuki.com/entry/2018-11-27-215047>

# コンゴ民主共和国の歴史と動乱

79 回生 重永 真拓

コンゴ川流域には紀元前から森林の狩猟採集民、森林からサバンナに移行する地域の農耕民、コンゴ川の漁撈民が暮らし、それぞれが地域の首長の下で親族関係を基礎とする小集団を形成していた。15世紀にはコンゴ王国、ルバ王国、ルンダ王国が成立し、ヨーロッパ商人やアラブ商人との交易を行っていた。その後、19世紀にアフリカの植民地化が進むと、1885年のベルリン議定書によってコンゴ地方はベルギー国王レオポルド2世の私的所有地コンゴ自由国となり、1908年には統治権がベルギー政府に譲渡されてベルギー領コンゴとなった。第二次世界大戦後の1960年に独立を果たすが、直後から国内は混乱した。かつての植民地支配下では、反乱がおこったときの動員は狭い社会的基盤で行われ、民族的な性質を持つことが多く、ほぼ例外なく地元植民地政府への犯行であった。しかし、独立以降、国家からの分離や政府転覆を目指す反乱が国土の大部分に広がったため、暴力の規模は劇的に拡大した。そして、4つの政府が正当性を争うコンゴ動乱が発生した。銅やコバルト、ウランなどの地下資源に恵まれた南部のカタンガ州が、旧宗主国のベルギーの支援を受けて独立を宣言した。これに対してコンゴ政府は、当時のソ連に支援を求める一方、コンゴの社会主義化を恐れたアメリカも紛争に介入し、多くの犠牲者を出す内戦となった。1965年にモブツがクーデターによって政権を掌握し、選挙の廃止、他政党の排除、治安部隊と傭兵の展開によって、武装動員のきっかけを作る事件とそれを増長させる社会インフラの両方を抑え込むことができた。また、原材料と農作物の輸出によって、モブツが統治を始めてから最初の13年間で国民一人当たりの所得はほぼ3倍になった。これによって雇用が増加し、軍備が整備された。結果的に、モブツによる1997年まで32年間の独裁体制が敷かれた。その間、1977年と1978年には反政府武装勢力がシャバ州に進行する事件が起きた(第一次、第二次シャバ危機)。モブツ政権はこの危機を乗り切ったものの、1980年代には民主化の動きが加速して独裁体制が揺らぎ始めた。1990年代に入って隣国ルワンダで内戦が始まると、その影響はコンゴ東部にも及んだ。1990年にはツチ武装勢力のルワンダ愛国戦線(RPF)が隣国ウガンダからルワンダへ侵攻し、

フツのハビヤリマナ政権との間で内戦が始まった。1994年にはハビヤリマナ大統領の死をきっかけとして、フツ過激派がツチ住民とフツ穏健派を虐殺するルワンダ・ジェノサイドが発生した。その後、RPFが政権を奪取すると、報復を恐れたフツ過激派とフツ住民が大量に周辺国に逃れた。今後東部にも大量の難民が流入し、混乱に陥った。難民キャンプはルワンダでの虐殺を主導したフツ武装勢力の拠点となり、政権奪還を目指してルワンダへ越境攻撃を開始したり、コンゴ東部にすむルワンダ系住民に対して攻撃を加えたりした。こうした問題にコンゴ政府が有効な対策をとれなかったことから、1996年10月、コンゴ東部の反政府武装勢力がツチの民兵組織と合同して「コンゴ・ザイール解放民主連合(AFDL)」を結成し、これをルワンダ、ウガンダ、ブルンジ、アンゴラなどの近隣諸国が支援する形で、モブツ政権の打倒を目指す闘争が始まった。これが、第一次コンゴ紛争(1996~97年)である。1997年5月にはAFDLが首都キンシャサを陥落してモブツはオランダに亡命し、AFDL議長であったローラン・カビラが新大統領に就任した。L.カビラは新政権を樹立すると、ルワンダの影響力を政権から駆逐しようとし、1998年、L.カビラの政策転換に反発したツチ勢力が「民主コンゴ連合(RCD)」と「コンゴ解放運動(MLC)」を結成し、今度はL.カビラ打倒を目指す闘争を開始した。これが第二次コンゴ紛争(1998~2003年)である。RCDとMLCの側にルワンダとウガンダが加勢する代わりに、L.カビラ側にはアンゴラ、ジンバブエ、ナミビアなどが加勢し、紛争は国際紛争へと拡大した。1999年にはザンビアの仲介によってルサカ停戦協定が結ばれ、国連PKOとして国連コンゴ民主共和国ミッション(MONUC)の派遣が決まったものの、その後も和平の履行は進まなかった。

状況が好転するのは、2001年に暗殺されたL.カビラの後を継いで息子のジョセフ・カビラが政権の座についてからであった。最終的には2002年に、紛争の長期化による各国経済の疲弊や、諸国・国際機関の仲介努力が功を奏して包括的和平合意であるプレトリア協定が結ばれ、2003年に戦争は「終結」した。プレトリア協定後、コンゴは新国家の建設に向けて歩み始めた。2003年にはJ.カビラ政権とRCD、MLCなどの元反政府武装勢力とが権力を分有する形で移行政権が発足した。そして2005年には憲法に関する国民投票、2006年には大統領選挙と国民議会選挙が行われ、国家再建が進んだ。軍事面でも、反政府武装勢力が国軍に統合さ

れ、政府や MONUC による武装解除が進められた。しかし、戦争が「終結」してもなお、コンゴ東部では紛争状態が継続している。特定のエスニック集団の自衛を主張する武装勢力や周辺国の反政府武装勢力が活動し続け、国連の報告によれば、2013 年に武力衝突を起こした武装勢力は 11 集団に上っている。MaiMai と呼ばれる地域的な自衛集団や分派を含めれば、コンゴ東部に存在する武装勢力の数は 40 を超える。そして、こうした武装勢力が資金源として利用しているのが、コンゴ東部の豊富な資源である。このような武装勢力による戦争資源の利用を停止させ、紛争状態を改善する方策として、2010 年から OECD やアメリカ政府による紛争鉱物取引規制が行われている。結果的に、これらの戦争鉱物取引規制の導入後、コンゴ東部では徐々に状況の改善が始まっている。しかし、残存する武装勢力による住民への暴力は依然として続いており、すべての鉱山がコンフリクト・フリー(紛争にかかわらない状態)になるにはいたっていない。

最後に、戦争「終結」後の流れについて書く。時代は 2003 年ごろにさかのぼる。和平プロセスの主たる障害になったのは RCD だった。RCD は最強の交戦主体の一つであったが、残虐行為とルワンダによる支援のため極めて不人気で、来る選挙で力を大きくそがれる立場にあった。彼らの主としてルワンダによる支援に由来する軍事的な強さと支持の弱さの隔たりこそが、その後の新たな反乱を生み出した。2006 年の選挙では、不人気が如実に表れ、国土の 3 分の 1 を支配する勢力から、議会で 4 % 程度を代表するに過ぎない存在へと変わった。さらに、移行期の終了に伴って、RCD は治安維持機関、国家行政機関、外交機関での任命や昇進にも影響力をふるえなくなった。また、新たな危機を引き起こすうえで、ルワンダ政府も決定的な役割を果たした。政権与党のルワンダ愛国戦線(RPF)は長きにわたりコンゴ東部を国家安全保障上の重要地域と位置づけ、幹部の多くは同地域に個人的・経済的なつながりを持っていた。RPF は、コンゴ東部情勢の推移に影響を与える手段も持っていた。後に、RPF の指導者は、そのほとんどがコンゴのトゥチ人コミュニティ出身者であった RCD 司令官の小グループをたきつけて、新たに反乱を開始させることになる。RCD は拠点を失いかけている上、内部分裂が起り、幹部が次々にカビラ側に寝返っていて危機を感じており、RCD 内の一派とルワンダ政府が、自らのコンゴ東部での権益を守ろうとして CNDP が出現した。互いに全

く異なる複数の武装勢力から新国軍を作り上げているさなか、数万の兵士を動員解除しているまさにその時に、CNDP は生まれたばかりの治安組織を劇的に弱体化させたのである。また、これに伴って、移行政府の対応(新しい民主的諸制度の利用を謳う進歩的な憲法が制定されたにもかかわらず、移行政府は主に利権の分配の上に成立していた。)に失望していたマイマイなど、様々な小規模な武装勢力の対抗的動員が大々的に引き起こされた。コンゴ国軍は最終的に 2009 年に CNDP の解体に成功したが、それまでにマイマイやその他の地元武装勢力のほとんどが自律的な推進力を持つようになった。武装勢力の数は 2005 年では 15 程度だったが、2015 年には 80 程度、2018 年には 130 程度に増加した。その一方で、反乱の目的も変容し、力の敵対的競合関係関係から武装勢力同士の強制的相互作用へと移行した。そこでは、すべての武装勢力が紛争の継続に既得権益を有している。CNDP が解体された後も、後継組織の三月二十三日運動(M23)が出現し、コンゴ東部の安定性を再び脅かした。しかし、暴力の性格は変化した。ルワンダの影響力が弱まり始めるにつれ、紛争はコンゴ政府による統治戦略の一部となっていった。武力紛争は、変更困難な現状になった。それは軍事指導者に利益をもたらし、武装勢力に所属もしくは関係する何十万人という人々に収入を与えている。武装勢力の激増と政府の分裂がアクターと潜在的スポイラー(紛争解決に反対し、妨害するアクター)の数を増やし、紛争解決を一層困難にしてきた。2012 年初めにコンゴ政府は、東部でコンゴ民主共和国軍を広く支配する元 CNDP ネットワークを解体するのを本格的に決断した。この動きの抵抗として、反乱軍 M23 が立ち上がったが、2013 年に M23 を打ち破った。しかし、この M23 の敗北以降、この紛争は自己推進力を持ち始め、現在でも完全には終わっていない。

コンゴの戦争が終わらないのは、和平合意が交戦主体間に安定した解決をもたらさず、代わりに CNDP を中心として紛争が激化し、それが変容していったからだ。RCD とルワンダ、地元の武装勢力、そしてコンゴ政府自身という主要紛争当事者が、紛争をやめることが利益にかなうとは考えず、それがコンゴ紛争の継続につながっている。

参考、引用：「名前を言わない戦争 終わらないコンゴ動乱」ジェイソン・K・ス  
ターズ著

「資源問題の正義ーコンゴの紛争資源問題と消費者の責任」華井和代  
著

「地図でわかる世界の戦争・紛争③アフリカ～ソマリア内戦、コンゴ  
動乱ほか」小川浩之著

# 関東～関西間の交通の難所

79 回生 小西 權世

## はじめに

日本一の人口が多い関東圏と、その次に人口の多い関西圏を結ぶ交通路は、必然的に日本のメインルートになります。その道中にはいくつかの難所があり、時代や手段によって通るルートも変わってきます。この文章では、どのように難所を克服したのか、東海道ルートについて見ていこうと思います。

## 東海道ルートの概要

東海道ルートは、東京から横浜や静岡、名古屋などの太平洋沿岸の都市を通り、関西の大阪、京都、神戸に至るルートです。このルートを取っているのは旧東海道や国道1号、(新)東名・(新)名神高速道路や、東海道本線、東海道新幹線などです。

まずは、各ルートについてさらっと見ていきましょう。

東海道は東京(江戸)の日本橋を起点として、京都の三条大橋までを結ぶ、江戸時代の日本の大動脈で五街道のうちの一つです。道中には東京の品川宿から滋賀の大津宿まで53の宿場町があり、東海道五十三次と呼ばれています。

国道1号は、起点は東海道と同じく日本橋、終点は大阪の梅田新道です。だいたい東海道と同じルートを取っています。

東名高速道路と名神高速道路は、国道1号の交通量増加に伴って開通した高速道路です。高速道路ナンバリングではE1が付与されています。1963年に名神高速道路が尼崎～栗東間から開通したのが日本の高速道路の始まりです。東名高速道路は後で述べる神奈川・静岡県境区間を除いて東海道と同じルートですが、名神高速道路は中山道に近い場所を通ります。

新東名高速道路は、東名高速道路の需要増加に対応するために建設中の高速道路で、神奈川・静岡の県境区間のみが未開通です。おおむね東名高速道路よりも山側を通過していて、技術の発展に伴い長いトンネルが増え、線形がよくなっています。そのため静岡県区間では制限速度が120km/hとなっています。伊勢湾岸自動車道、新名神高速道

路は名古屋～草津付近までは東海道に近いルートをたどりますが、そこからは山の中を通り、神戸 JCT までを結んでいます。

一方の鉄道、東海道本線は、名古屋までは 1889 年に新橋～神戸間が開通した、日本で最初の幹線です。東京から名古屋までは東海道ルート、名古屋から京都までは中山道ルートを通ります。そして、その東海道本線の需要増加への対応及び高速化のために作られたのが東海道新幹線です。最高速度は 285km/h で、東京～新大阪間を 2 時間半で結びます。

## 難所① 神奈川・静岡県境

東海道ルートで一番の難所と言われているのが先ほども何回か書いた神奈川・静岡県境区間です。伊豆半島の付け根にあたるこの場所は険しい山が連なっています。

東海道と国道 1 号は天下の険、箱根峠を超えるルートを取ります。昔は長いトンネルを掘る技術などなかったので、カーブが多く、勾配が急でも山の上を通っています。箱根峠は標高 849m の峠で、国道 1 号や東海道の道中ではもちろん最高標高の峠です。国道 1 号の現道は箱根湯本から大平台や宮ノ下、小涌谷、芦之湯といった温泉地を通っていますが、東海道は須雲川沿いを通っています。また、芦ノ湖の沿岸には箱根関所が設置されていて、「入り鉄砲に出女」という文言でも有名なように、江戸に出入りする物や人を監視していました。

一方、東名高速道路は箱根峠を北に迂回して比較的勾配が緩やかな御殿場方面に迂回しています。渓谷沿いの区間も存在しているので、多少のトンネルはありますが、国道 1 号に比べ勾配が緩くカーブも少ないので道路の高速化に成功しています。新東名高速道路もまだ開通していませんが、このルートで建設が進められています。従来の東名高速道路よりもさらに山よりを通り、長いトンネルも多くなる予定ですが、さらに線形がよくなり、さらなる高速化が見込まれます。

東海道本線、東海道新幹線の鉄道路線は箱根峠よりさらに南、静岡県熱海市と三島市の間をそれぞれ丹那トンネル、新丹那トンネルと呼ばれる長大トンネルで通過しています。

丹那トンネル開通以前、東海道本線は先ほど述べた御殿場経由のルート（現在の御殿場線）を通過していました。このルートは車輪がゴム、地面がアスファルトの車にとっ

てはそこまで厳しくない勾配なんです、車輪と線路がどちらも鉄の鉄道にとってはかなりの急勾配でした。そこで鉄道省は明治 43 年に熱海と三島を結ぶ丹那トンネルを計画しました。工事では断層や湧水等に苦しめられ、事故や犠牲者も出ましたが、16 年の工事の末に 7804m のトンネルが開通し、東海道本線はなんと所要時間を 50 分短縮することに成功しています。

東海道新幹線は丹那トンネルの 50m 北に並行するように作られた新丹那トンネルでここを通過しています。すぐ横ということで同じ地盤条件のため、東海道新幹線建設の中でも難工事が予想されていましたが、時代の進化に伴い、4 年余りでトンネルは開通しています。

## 難所② 静岡平野前後の山が海に迫る場所

静岡平野の前後では、山が海に迫っていて、平地がありません。ひとつは由比～興津の区間、もう一つは静岡市と焼津市・藤枝市の市境区間です。

由比～興津の区間では少しだけ平地があり（といってもかなり狭いですが）、新東名高速道路と東海道新幹線以外は海岸沿いを通過しています。東名高速道路と東海道本線には短いトンネルこそありますが、ほぼ地上区間で通過しています。一方東海道新幹線は高速化のため、少し内陸側を長いトンネルで押し切っています。新東名高速道路はもともと内陸側に建設された道路なので、山あいの区間を通っています。

一方の静岡市と焼津市・藤枝市の市境区間では、海岸から山が切り立っていて、平地がほとんどありません。そのため、東海道と国道 1 号は通りやすい内陸の宇津ノ谷峠を通り、東海道本線、東名高速道路、東海道新幹線は海岸沿いを長いトンネルで貫通しています。新東名高速道路は例によって宇津ノ谷峠より内陸をトンネルで通過します。

## 難所③ 鈴鹿峠

三重県と滋賀県を分ける鈴鹿山脈のなかで東海道などが通る峠が鈴鹿峠です。国道 1 号は例によって東海道と同じルートをたどっているため、鈴鹿峠を通過（短めのトンネル）しています。また、新名神高速道路は鈴鹿峠の少し北側を 4000m 超えのトンネルで通っています。

ただ、先ほども述べたように、東海道本線や東海道新幹線、名神高速道路は大きくルートが違い、中山道に近いルートをたどります。東海道は名古屋から西に向かい、三重

県の亀山から北上し滋賀県に入ります。一方の東海道本線などは名古屋から北上し、岐阜で西に進路を変えて関ヶ原方面から滋賀県に入ります。これはそちらのほうが大きい都市を多く経由できるということと、峠越えが鈴鹿峠に比べて楽であるという2つの理由があると考えられます。鉄道だと東海道に最も近いのは名古屋～柘植の関西本線と柘植～草津の草津線でしょうか。このルートでは三重・滋賀県境には難所はありませんが、亀山市と伊賀市の間に加太越えという鉄道にしてはなかなかの峠越えがあります。

## おまけ

現在はなんともなく近鉄や JR が通っている名古屋から桑名に向かう区間ですが、東海道がつかわれていた時代は難所のひとつでした。というのも、当時はもっと海岸線が現在の内陸側にあり、熱田神宮の近くの宮宿から桑名宿までは「七里の渡し」といって舟での道のりとなっていました。桑名の長良川沿いには七里の渡し跡に大鳥居が立っています。

### 参考文献など

昭文社「日本歴史地図帳」

国土地理院 地理院地図

鹿島建設株式会社 <https://www.kajima.co.jp/gallery/kiseki/kiseki03/index-j.html>

[https://www.kajima.co.jp/news/digest/sep\\_2014/feature/shinkansen/index-j.html](https://www.kajima.co.jp/news/digest/sep_2014/feature/shinkansen/index-j.html)

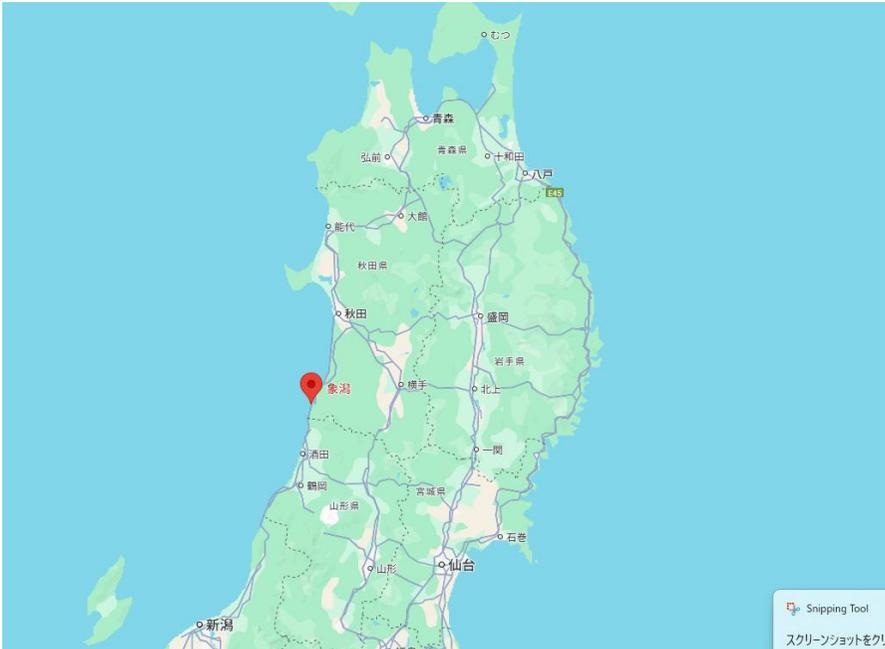
NEXCO 東日本 <https://www.e-nexco.co.jp/company/overview/chronology/>

# 秋田の祖父の実家の歴史について

82回生 石橋 豊

はじめに

私の祖父の実家（斎藤家）は秋田県の象潟にあり、すこし変わった家なのですが、その家の歴史を調べるととんでもないことを見つけてしまい、現時点で分かっていることをまとめることにしました。



## 1. 斎藤家の当主の名前について

斎藤家の当主の名前について、斎藤家の当主は代々斎藤與兵衛（斎藤與兵衛は旧字体の与兵衛だが、以降は旧字体を使わない）を名乗っていたことが

分かっており、(直近三代は名乗っていない) それによって、戸籍や手紙などから特定できる。

## 2. 斎藤家の位置づけ

象潟町において斎藤家がどのような位置づけだったのかについては、戊辰戦争の際、親戚である斎藤与治兵衛の家が秋田藩（佐竹）の仮本陣に使われていることから、かなり豊かであったと考えられる。

## 3. 斎藤与兵衛の初出

斎藤与兵衛の初出については、象潟町史において、次のように書かれている。

「棟札に名のある主なる人々の子孫その他について列挙すれば、まづ斎藤与助は絶家して今はない。斎藤与治兵衛の子孫で国太郎氏は町会議員に当選活躍した。残念ながら子なく行太郎氏が養子に入って継いでいる。斎藤与兵衛エの子孫秀太郎氏は象潟屈指の財をなしている。」

この「棟札」というのは、腰掛八幡宮の棟札であり、天長二年（八二五）とある。よって、斎藤与兵衛は9世紀初頭には象潟に住んでいたと思われる。

## 4. 腰掛八幡宮について

腰掛八幡宮については、秋田県神社庁のホームページに記載されており、その由緒については以下のように記載されている。

「創立は神護景雲元年と伝え、或は神功皇后の3年也と謂うと雖も、事宏遠にして判明しない。

正嘉年中最明寺時頼の寄付状に「象潟は八幡大菩薩降臨之砌也」とあるのを見れば、亦拠り所なきにあらずである。

時頼は仏教帰依者であったので菩薩と称せらるべきである。

時頼当社を崇敬する事浅からず、資財を投じて再建を命じている。

弘長3年に至り落成す。

当時の棟札

天者至神也神者歸信故信者誠也

奉造立一字宮殿八幡大神宮 司宮 伊勢守

大願成就 羽後油理郡御地頭代官

弘長三癸亥年八月十五日氏子安全

同上裏面

監工氏名 大工氏名 木挽氏名

一天太平社頭興栄常盤垣守幸給

総氏子氏名 大塩越

当社往古は琴脇に鎮り座せしを、近古に於て現今の地に遷座せられしものという。

古伝に曰、皇后しばしの程駒を留め五ノ石に御腰をおろされ四方を御覧あそばれし所と言ひ伝えられ腰掛八幡宮と申し上げている。」

最明寺時頼とは北条時頼のことであり、北条時頼が再建を命じ、**1263**年に再建が完了したと書かれておいる。また、象潟町史には腰掛八幡宮は七六三年に創建されたと書かれている。さらに、腰掛八幡宮の参道が斎藤家の家の真裏に位置することから、斎藤家が腰掛八幡宮の創建に関わった可能性は高い。

## 5. 「斎藤」という名字について

斎藤与兵衛のルーツを探る方法として、「斎藤」という名字から探ることができそうだ。斎藤姓のルーツを調べると、藤原利仁の子の叙用が伊勢神宮の

齋宮頭を務めたときに名乗ったらしい。藤原叙用の没年については不明だが、藤原利仁が九一五年に鎮守府将軍になっていることから、齋藤与兵衛のルーツは藤原利仁ではないようだ。しかし、「齋藤」という姓が藤原氏関係である可能性は高い。

## 6. 齋藤与兵衛はいつ象潟にやってきたのか

齋藤与兵衛はおそらく、蝦夷戦争にて移民として象潟にやってきたと思われる。象潟には駅家（中継地点のようなもの）もあったことから、蝦夷である可能性は低いだろう。また、蝦夷戦争では、主に中部地方、関東地方から移民が送られたため、齋藤与兵衛はもともと中部地方、関東地方に住んでいた可能性が高い。

## 7. 今後の方針

今後の方針については、腰掛八幡宮と齋藤与兵衛の関係から調べていき、齋藤与兵衛のルーツを探るのが厳しそうになったら、次は齋藤家が象潟でどのように財をなしていったのかなどを調べようと思っている。これについて、現時点では、象潟港の建設に齋藤与兵衛が関わったことが分かっている。

## 参考文献

- ・「象潟町史」象潟町編
- ・福井県立図書館・文書館 2025/3/25 閲覧  
「[図説福井県史 古代 16 利仁将軍と北国武士団\(1\)](#)」

<https://www.library-archives.pref.fukui.lg.jp/fukui/07/zusetsu/A16/A161.htm>

・家庭画報

「全国の「斎藤・斉藤」さん、名字のルーツご存知ですか？ 【姓氏研究家が解説する、名字 **365**】」森岡浩 **2025/3/25** 閲覧

<https://www.kateigaho.com/article/detail/177402>

## 日本海軍・陸上戦闘機の発達について

大越 智悠

日本の海軍機、というと、皆さんは何を思い浮かべるでしょうか？

おそらく、ゼロ式艦上戦闘機、通称「ゼロ戦」が真っ先に出てくる方が多いのではないのでしょうか。ひとまとめに海軍機といっても、海軍機もいくつかの種類があります。

ゼロ戦は、「艦上機」（そのなかでも艦上戦闘機に分類される）とよばれ、信濃や赤城などの空母から自力での発艦および直接着艦を行う航空機のこと、ゼロ戦以外にも九七式艦上攻撃機などがこれに含まれます。

今回僕が扱うのはゼロ戦たちとは違う種類である「陸上機」とよばれる航空機たちです。

陸上機はその名の通り陸上から離着艦できる航空機の総称で、日中戦争中から戦後にかけて発達していきました。

「雷電」は陸上機の中でもかなり有名なものではないかとおもいますが、この雷電は、日中戦争によって発達した陸上機の最たるもので、敵の双発高速爆撃機の奇襲に悩まされた海軍が計画した爆撃機遊撃を主目的とした局地戦闘機で、第二次世界対戦の勃発により入手の確実性から発動機が変更され、まあそれに伴って胴体半ばが断面積最大となる独特な形状を取っています。しかしこの独特な胴体から実機では気流の乱れをうみ、飛行性能が落ち、空戦中に失速しスピンするなどの問題が露呈しました。しかし、当時太平洋戦争開戦後の切迫した状況であったことから実戦化が急がれ根本的な解決は見送られ、雷電はその高い上昇力



を生かした戦闘機として量産に移されました。

↑ 雷電 独特な流線型をしている。

「雷電」と並んで有名なのが「紫電」です。紫電は、もとは水上戦闘機「強風」を陸上機に改造したもので、この強風も雷電と同じ「火星」発動機を使っており、それを元に作られたのが紫電であるため、雷電と同じ独特な形状、それによる同じ問題を抱えてしまうことになったのです。さらに水上戦闘機から陸上機に改造する過程で主脚に2段引き込み構造を採用しており、それによって長く伸びた主脚が地上滑走時の破損事故を引き起こし、極めて事故、トラブルの多い戦闘機になってしまったのです。しかし20mm機銃4丁を搭載した強力な機銃兵装への期待から欠点を抱えたまま大量生産が決行され、昭和19年のフィリピン航空決戦から実戦へ、また後に紹介する「紫電改」と共に本土防空戦にも参加することになります。

前述したようにさまざまな問題を抱えていた紫電の欠点を改善するために制作されたのが「紫電改」で、雷電、紫電共に抱えていた失速しスピンしてしまう問題を胴体の延長によって改善・補正し、さらに主翼を胴体の下の方へすることで視界も良くすることが出来ました。このような改良により、紫電改と市電はほぼ別の機体となっています。(共通点は主翼の基本設定程度)飛行特性に悪癖がなく、事故の原因となっていた長い主脚も短縮され、性能不振とも言われていた「誉」発動機を搭載しながらも飛行性能は優秀であり、試作機が時速620kmを発揮したことから三菱、愛知、昭和工廠などでの量産も準備されていました。この紫電改は、生産はわずか400機あまりであったにもかかわらず、第343海軍航空隊のみに集中的に投入されたことから、戦争末期に貴重な戦闘機戦力として大活躍を果たしました。

紫電改があまり生産されずに終戦を迎えたように、力が発揮されないまま終戦を迎えた戦闘機もあります。例えば「震電」は、実戦に投入されないまま終戦を迎えた局地戦闘機のひと



つです。この震電はどちらが前か分からない独特な前翼形式を取り、時速 740km を突破する高速高高度戦闘機として計画されました。もとは海軍航空技術廠で飛行実験が行われた実験グライダーに始まり、その成果に注目した空技廠長、和田操中将の後押しで試作が決定しました。本来空技廠が担当するはずでしたが、戦争末期の影響で設計リソースの不足から九州飛行機によって設計が行われ、昭和 20 年の終戦直前に初飛行に成功しました。震電は戦争末期特攻機の試作と増産がメインで行われている中、終戦まで試作が作られ続けていた数少ない戦闘機のひとつです。それは、胴体先端に搭載された大火力の 30mm 機銃 4 挺の大火力と高高度戦闘機への期待だったと考えられます。

↑震電 独特な前翼構造をしている。

今回主に 3 つの戦闘機について書きましたが、それ以外にも試作のまま終わった戦闘機、あまり実戦で活躍出来ずに終わった戦闘機は沢山存在しています。今後も戦闘機について、国内外問わず、見聞を深め、来年の部誌に活かしたいと思います。

参考文献

[https://www2.nhk.or.jp/archives/movies/?id=D0009181263\\_00000](https://www2.nhk.or.jp/archives/movies/?id=D0009181263_00000)

歴史群像編集部、日本海軍機図鑑/2021 年

[https://www.jiji.com/sp/v2?id=20110904japanese\\_naval\\_aircrafts\\_08](https://www.jiji.com/sp/v2?id=20110904japanese_naval_aircrafts_08)

# 和氣清麻呂に関する伝説について

80 回生 田中 康太郎

## 0. はじめに

この部誌は日本史上唯一、皇位に天皇家の血筋を持たない者が就こうとした宇佐八幡宮信託事件に関連する和氣清麻呂が関わる伝説について記したものである。この際、この書は私の政治的立場を踏まえずに先行研究を纏め、私の考察を加えたものであることを了承してお読み頂ければ幸いです。

## 1. 宇佐八幡宮信託事件

### (1) 宇佐八幡宮信託事件に至るまで

749年聖武天皇が譲位し、女帝孝謙が誕生した。当時は天然痘で死んだ藤原四子や反乱を起こした藤原博嗣といった藤原氏を凌いだ橘諸兄が政権を持っていた。しかし、孝謙の母の光明氏が藤原氏出身なので南家の藤原仲麻呂を重用することになる。756年橘諸兄が失言のため失脚すると仲麻呂が政権を握る。これに反発した橘諸兄の子の橘奈良麻呂は橘奈良麻呂の変を起こすが失敗に終わる。この際、仲麻呂は奈良麻呂の他反仲麻呂勢力を排除、死亡させることができ、安定した政権運営が行われることとなった。758年孝謙が淳仁に皇位を譲ると、仲麻呂は恵美押勝の名を賜り、右大臣、760年には太政大臣となる。ただ、光明皇太后の没後に仲麻呂、淳仁と孝謙が対立していくこととなる。この頃には孝謙の健康状態が悪化し、道鏡が治療にあたると良化した。これにより道鏡は孝謙から寵愛を受けるようになり、孝謙、道鏡と仲麻呂、淳仁の対立が激化する。衝突が避けられなくなると764年に仲麻呂は反乱のため軍事の掌握を企てるも、孝謙側がそれを察知し、藤原仲麻呂の乱が起こる。先手を取られた仲麻呂は

敗戦を重ねた後死亡。淳仁は廃位となり、次の皇位には孝謙が重祚し称徳と名を改めた。

## (2) 宇佐八幡宮信託事件

称徳天皇のもとで道鏡は765年に太政大臣となり、766年に法王となる。こうして、称徳天皇の寵愛を一身に受けた道鏡は、政権を持つようになる。称徳は独身で子供もいなかったため、その後の皇位を誰が継ぐのかが政界の最大の関心事となった。765年8月、天武天皇の曾孫で従三位であった和気王が謀反の罪で処刑され、10月に淡路に流された淳仁が暗殺と目される死を迎え、769年5月には聖武天皇の娘の不破内親王が内親王の身分を廃された。このように皇族に対する粛清が次々と行われていき、皇位継承問題は事実上の禁忌となった。

そのような中769年5月、道鏡の弟で太宰師の弓削浄人と大宰主神の習宜阿曾麻呂が、「道鏡を皇位につかせたならば天下は泰平である」という内容の宇佐八幡宮の神託を奏上し、道鏡は自ら皇位に就くことを望んだ。称徳は宇佐八幡宮から法均(和気広虫)の派遣を求められ、病弱な法均は代理として弟である和気清麻呂を派遣した。清麻呂は天皇の勅使として8月に宇佐神宮に参宮し、「わが国は開闢このかた、君臣のこと定まれり。臣をもて君とする、いまだこれあらず。天つ日嗣は、必ず皇緒を立てよ。無道の人よろしく早く掃除すべし」という大神の神託を訊き、大和に持ち帰り奏上する。

道鏡を天皇につけたがっていたといわれる称徳は報告を聞いて怒り、清麻呂を因幡員外介に左遷したのち、さらに「別部穢麻呂(わけべのきたなまろ)」と改名させられ、道鏡により脚の臑を切られて大隈国へ配流され、姉の広虫も「別部広虫壳(わけべのひろむしめ)若しくは、狭虫(せまむし)」と改名させられ処罰された。10月1日には詔を発し、皇族や諸臣らに対して聖武天皇の言葉を引用して、妄りに皇位を求めてはならない事、次期皇位継承者は聖武天皇の意向によって称徳自らが決める事を改め

て表明する。

宝亀元年（770年）に称徳天皇が崩御すると、「続日本紀」によると群臣の評議の結果、皇太子を白壁王（後の光仁天皇）とする称徳天皇の「遺宣」が発せられ、光仁天皇が即位になって年号を宝亀と改めると、9月6日和気清麻呂は召し返され、771年3月29日には元の位に着き、9月16日に薩摩の国員外の介に任ぜられたが、間もなく豊前の守に還されました。その後、和気清麻呂は古事に通じ「民部省例」や「和氏譜」を著し、平安遷都の成功を残した。一方道鏡は、道鏡は下野国の薬師寺へ左遷（配流）された後再び京都の地を踏むことは無かった。

## 2. 和気清麻呂に関する伝説

### （1）伝説について

和気清麻呂が関係する有名な伝説は2つある。

1つ目は信託の際のものである。清麻呂は天皇の勅使として8月に宇佐神宮に参宮。宝物を奉り宣命の文を読もうとした時、神が禰宜の辛嶋勝与曾女に託宣、宣命を訊くことを拒む。清麻呂は不審を抱き、改めて与曾女に宣命を訊くことを願い出る。与曾女が再び神に顕現を願うと、身の丈三丈（約9m）の僧形の大神が出現。大神は再度宣命を拒むが、再度聞くと、清麻呂は「わが国は開闢このかた、君臣のこと定まれり。臣をもて君とする、いまだこれあらず。天つ日嗣は、必ず皇緒を立てよ。無道の人よろしく早く掃除すべし」という大神の神託を得たというものである。

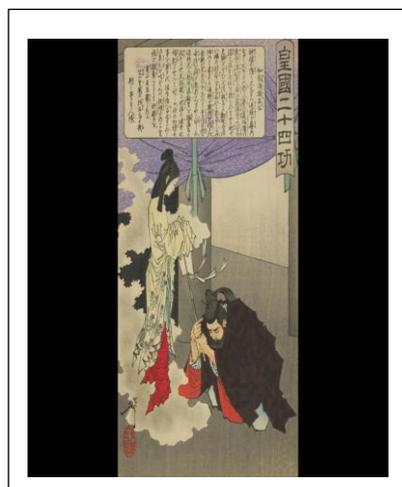
2つ目は霊猪伝説である。宇佐神宮によると「道鏡の怒りを持った清麻呂は、脚の腱を切られた上、大隅国へ流された途中、暗殺を謀って送られた道鏡の刺客から、突然の天地雷鳴や300頭あまりの猪の大群が和気清麻呂を護り、さらに宇佐へ詣でたところ、道鏡に傷つけられた脚が回復する」といったものである。

## (2) 信託伝説について

信託伝説とは先程も述べた通り、宝物を奉り宣命の文を読もうとした時、神が禰宜の辛嶋勝与曾女に託宣、宣命を訊くことを拒む。清麻呂は不審を抱き、改めて与曾女に宣命を訊くことを願い出る。与曾女が再び神に顕現を願うと、身の丈三丈（約9m）の僧形の大神が出現し、清麻呂は大神の神託を得たというものである。

これに関して、続日本紀に和氣清麻呂は称徳から信託を聞いてくる旨の詔を受け、道鏡からも吉報(自身を皇位に就ける宣託)をもたらせば、官職を高くもたらずと持ち掛けた記述があり、称徳が道鏡に皇位を譲りたがっていたことを鑑みると、勝与曾女に託宣が下りたのは称徳・道鏡側が仕組んだものと考えられる。

また、身の丈三丈の僧形の大神が出現し、清麻呂が宣託を得たのは、神の子孫として権威を振るっていた天皇に反論させないために作ったものだと考えられる。



## (3) 霊猪伝説について

猪の助けを得て宇佐八幡宮に参るという伝説は、平安初期に藤原緒嗣らによって編纂された勅撰史書で、六国史の第三の「日本後紀」和氣清麻呂薨伝が初出である。

弟清麻呂脚瘧不レ能二起立一。為レ拜二八幡神一。輿レ病即レ路。及レ至二豊前国宇佐郡椛田村一。有二野猪三百許一。挟レ路而列。徐歩前駟十許里。走一入山中一。見人共異レ之。拜レ社之日。始得二起步一。

清麻呂は足を悪くし、輿に乗って宇佐八幡宮に向かい、豊前国宇佐郡椛田

村で三百匹の猪に出会う。猪は清麻呂の左右を囲んで、十里（約 40 k m）ばかり走って山中に消える。そして八幡官を拝むと清麻呂の足は治り、立てるようになる。初め輿に乗って宇佐へ向かった清麻呂が、馬に乗って帰ってきたのを見て、人々は大変驚いたという。

伝説の中で不可解なのが「楳田村」という村であり、所在不明が通説であり、現在は豊前国京都郡にあった楳田氏の領地であるという説が有力でこの楳田氏説をとると、清呂を護衛した三百頭の猪の正体は在地で清麻呂に呼応した者たちだという結論になる。また、続日本紀には霊猪伝説の記述がなく、日本後紀の和氣清麻呂薨伝が初出であることから、和氣清麻呂が皇統を守ったことが高く評価され、護衛を行った在地の者たちを山神である猪を味方につけたと置き換えることで、和氣清麻呂の功績と、神が味方している（つまり、天皇の正当性）を印象付けるものだと考察できる。

### 3. あとがき

私は結論として続日本紀と日本後紀の内容を踏まえて和氣清麻呂伝説を天皇・皇統の正当性や重要性を主張するために作られたと考察した。また、後世になって

和氣清麻呂の功績を称える内容も含まれていると考えた。

短い文章でしたがこのような堅苦しい文章を最後まで読んで頂きありがとうございました。これからも灘校と地理歴史研究部をよろしく願います。

### 4. 参考文献

土橋 誠「即位改元について」 <https://www.kyotofu-maibun.or.jp/data/kankou/kankou-pdf/ronsyuu6/18dobashi.pdf>

宇佐神宮 和氣清麻呂とご信託 <http://www.usajinguu.com/wake/>

和氣 彩那 和氣清麻呂の靈狼伝説における一考察 [2019BH0253.pdf](#)

宇治谷 孟 続日本紀(中)全現代語訳 講談社 1992年

宇治谷 孟 続日本紀(下)全現代語訳 講談社 1995年

鷺森 浩幸 藤原仲麻呂と道鏡 吉川弘文館 2020年

平野 邦雄 和氣清麻呂 吉川弘文館 1964年

# 先史時代から神聖ローマ帝国成立までのドイツの歴史

2-3-20 島根 瑞生

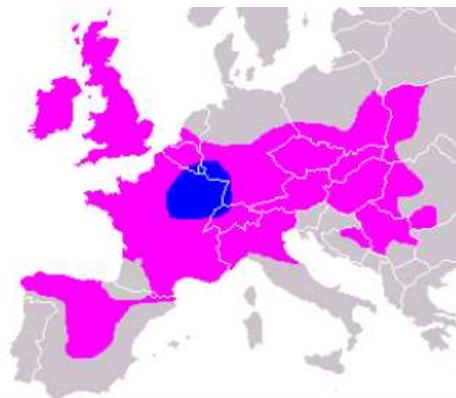
はじめに

今回僕はドイツが先史時代からどのような経緯を経て、今のドイツの源流である神聖ローマ帝国として成立したのかについて興味を持ったので調べました。

## 1. 先史時代から西ローマ帝国滅亡まで

現生人類は5万年前にヨーロッパに到達しました。

ヨーロッパ先住民族はケルト人であり、アルプス以北のヨーロッパに広く居住していたインド＝ヨーロッパ語族の一派で、原住地はライン川やドナウ川上流域の南ドイツと考えられています。ケルト人は西ヨーロッパに鉄器文化をもたらし、高い農耕・牧畜技術を持っていました。つまりドイツにいた最初の民族はケルト人でした。



ケルト人の分布  
● - 紀元前1500年から紀元前1000年  
● - 紀元前400年

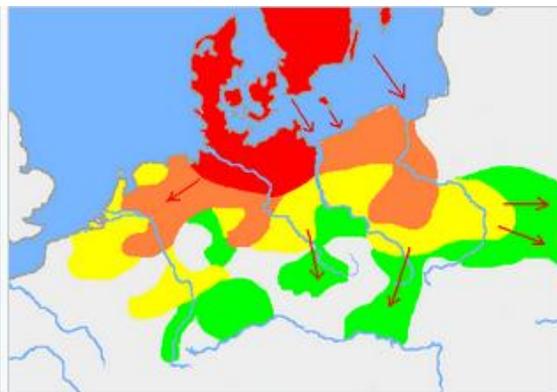
その後、ドイツを支配したのはゲルマン人です。ゲルマン人はスカンジナビア半島南部からバルト海・北海の沿岸で多くの部族に別れて牧畜と農耕を営んでいた民族で、ケルト人を圧迫して南下しました。ローマ人は彼らの支配地をゲルマニアと呼び、境界は西がライン川、東がヴィスワ川、北がバルト海、南がドナウ川にはさまれた領域でした。ローマ帝国はライン川西部と南部の小ゲルマニアを支配し、前一世紀よりリーメス（防衛線）を築きました。リーメスはライン川下流域の左岸、ドイツのレーニッシュ山塊からオランダの北海沿岸までの約400kmに及びます。その後初代ローマ皇帝となったアウグストゥスはゲルマニアをローマ領内に加えることを構想し、ティベリウス・大ドルススらの進撃によって一時期ローマ領はゲルマニア奥地にまで及びましたが、紀元9年のトイトブルクの戦いでの敗北後、ローマ軍はライン川の西にまで撤退し、以後この地はローマから独立を守りつづけました。



←  
 緑：ローマ帝国の支配を受けなかった大ゲルマニア

赤：ローマ帝国領  
 ライン川西部・南部にローマ帝国の属州である小ゲルマニアがある

375年、フン族に押されてゲルマン人の一派であるゴート族が南下し、ローマ帝国領を脅かしたことからゲルマン民族の大移動が始まりました。



ゲルマン民族の大移動の推移；紀元 前750年-1年[8]:

- 赤：移動前 紀元前750年
- 橙：紀元前500年
- 黄：紀元前250年
- 緑：1年

西ローマ帝国はライン・ドナウ川の向こう側にいたゲルマン人の侵攻を盛んに受けるようになり、476年にゲルマン人傭兵隊長オドアケルが滅ぼしました。

## 2. フランク王国成立から東フランク王国断絶まで

ライン川東岸にいたゲルマン人の一派のフランク人はゲルマン人の大移動の中で、5世紀に北ガリアに侵入しました。フランク人はサリ族とリブアリ族という支族にわかれていて、それぞれ『サリカ法典』、『リブアリ法典』というラテン語で書かれた部族の規則をもっていました。481年、フランク人のサリ族のメロヴィング家のクローヴィスがフランク人の各部族を統一して、ガリア（後のフランス）北部にフランク王国を建国してメロヴィング朝を開始しました。メロヴィング朝のフランク王国は、他のゲルマン諸民族がアリウス派のキリスト教を受け入れたのに対し、496年にクローヴィスが改宗してアタナシウス派に帰依し、ローマ＝カトリック教会と関係を深めてから、急速に勢力を増していきました。534年にはブルグンド王国を滅ぼしてガリアを統一しました。しかし、メロヴィング朝はゲルマン人の分割相続制を継承していたので、551年のクローヴィスの死以後はその子や孫の間で王国は分割され、6世紀後半には、東北部（アウストラシア、中心都市はメッス）、中西部（ネウストリア、中心都市はパリ）、東部（ブルグンド、中心都市はオルレアン）の三分国が成立し、南部（アクイタニア）は三分国の共同管理下に置かれました。

7世紀前半、ネウストリア分国のクロタール2世はフランク王国の統一を回復しようとして、各分国に宮宰（マヨル＝ドムス）の職を置きました。その中の東北部の宮宰であったカロリング家のピピン（2世）は権力争いに勝利し、二分国の宮宰の職を兼ね、フランク王国の実権を掌握しました。

ピピン2世の子のカール＝マルテルは全王国の宮宰（マヨル＝ドムス）を掌握し、バイエルンを服従させ、周辺のアラマン族、ザクセン族、アキテーヌ公などを服属させました。しかし、イベリア半島を制圧したイスラーム軍は、アブドゥル＝ラフマンを長として、732年にピレネーを超えてアキテーヌ地方のバイヨンヌやボルドーを略奪し北上しました。侵入を受けたアキテーヌ公の要請により、カール＝マルテルはオルレアンでロワール川を渡ってポワティエへ兵を進め、両軍は7日間対峙しました。このトゥール・ポワティエ間の戦いで、フランク王国の重装歩兵勢が、イスラーム軍の騎馬隊を潰走させて、アブドゥル＝ラフマンは敗死しました。

宮宰カール＝マルテルの子ピピン（小ピピン）はメロヴィング朝の権勢をしのぎ、751年に王位に就き、カロリング朝を創始しました。同じ年に、ランゴバルト人

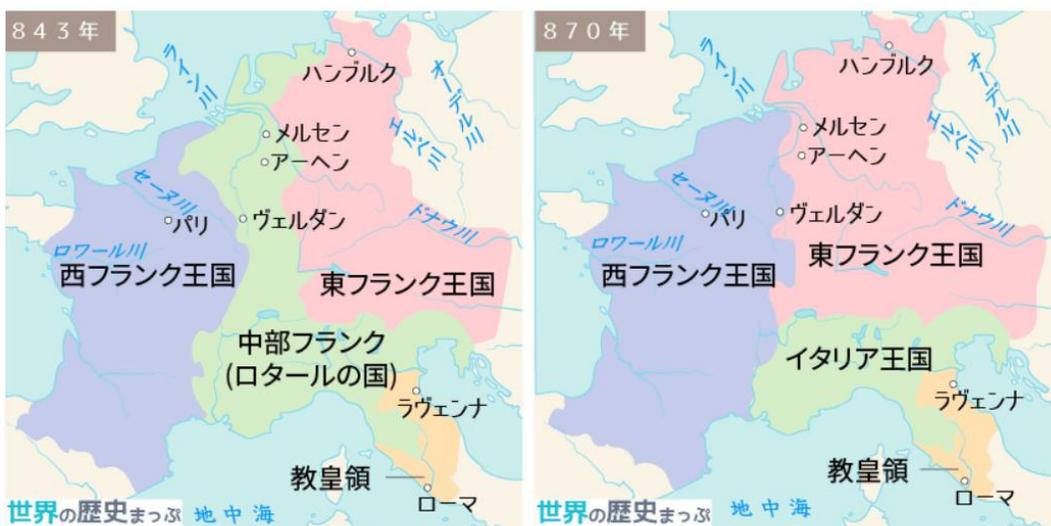
が教皇領ラヴェンナを支配したためローマ教皇は新たな後ろ盾を必要としていました。

754年、ローマ教皇ステファヌス2世は、カロリング朝フランク王国のピピンの王位を承認して、ローマ教会によって聖別される国としました。教皇の後ろ盾となったピピンは期待に応じて756年にランゴバルド王国からラヴェンナを奪い、ローマ教皇に寄進しました。

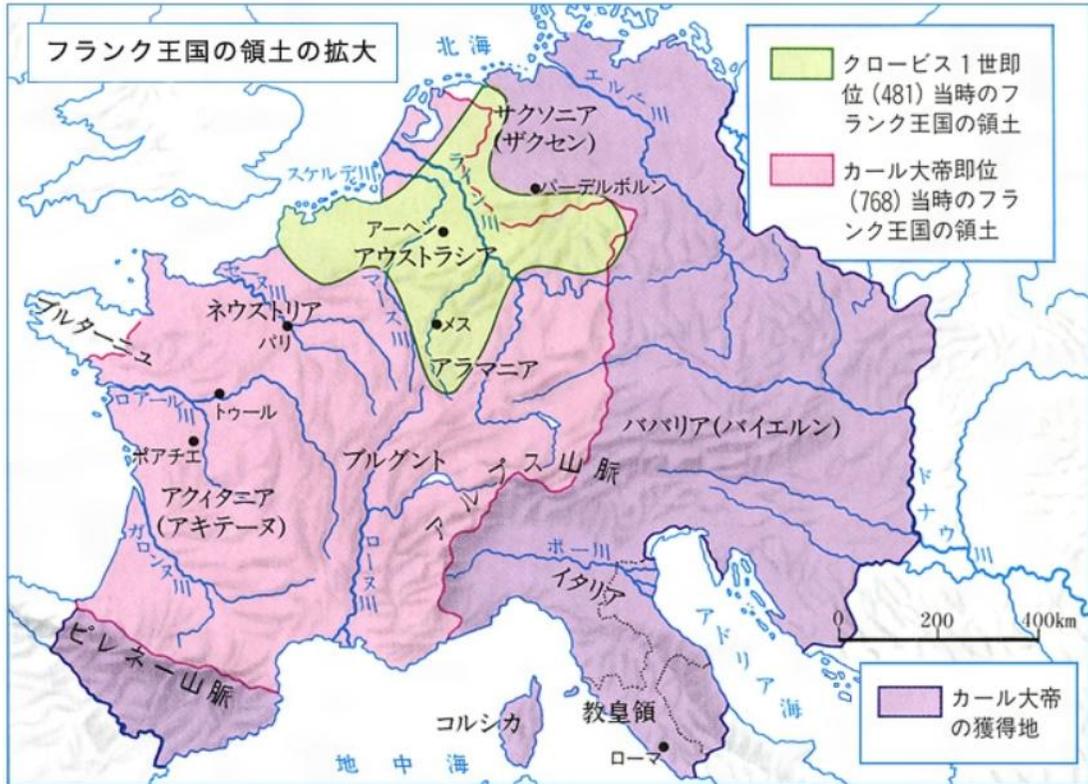
フランク王国は次のカール大帝の時代に全盛期を迎えました。カールは774年に北イタリアのランゴバルド王国を滅ぼし、800年にローマ教皇からローマ帝国皇帝の冠を授けられ（カールの戴冠）、同時に西ヨーロッパ全域を支配する王国の王権を獲得しました。さらに、東方ではハンガリーに侵入したアヴァール人を撃退し、イベリア半島ではイスラーム勢力と戦いました。しかし、地中海の制海権はイスラーム勢力によって抑えられたため遠隔地貿易は行われなくなり、貨幣経済も衰えて農業生産を基盤とした封建社会が始まりました。

封建制度のもとにあったフランク王国は統一性が弱く、カール大帝の死後は分割相続というゲルマン社会の相続制度もあって、その領土は843年のヴェルダン条約・870年のメルセン条約をへて東フランク、西フランク、イタリアの三国に分割され、東フランク王国はドイツの基盤となりました。三国で世襲が続きましたが、まずイタリアで875年に断絶し、次いで東フランクでは911年、西フランクでは987年にそれぞれ断絶してしまいました。

### フランク王国の分裂



843年ヴェルダン条約と870年メルセン条約地図 ©世界の歴史まっぷ



### 3. 東フランク王国から神聖ローマ帝国の成立

東フランク人の王はルートヴィヒ4世で断絶しましたが、代わりにザクセン人でザクセン家のハインリヒ1世が諸侯によって919年に東フランク王として選出され、ザクセン朝を開始しました。ハインリヒ1世はマジャール人の侵攻に備えました。

ハインリヒ1世の子であるオットー1世は955年にレヒフェルトの戦いでマジャール人を破ってキリスト教世界の守護者としての名声を高めました。962年にローマ帝国皇帝の冠をさずかり(オットーの戴冠)、初代の神聖ローマ帝国皇帝となりました。こうして神聖ローマ帝国は成立しました。

### 4. まとめ

今回僕はドイツがケルト人→ゴート人(ゲルマン人の一派)→フランク人(同)

→ザクセン人（同）と支配者が変わる中で、カール大帝の領土拡張、フランク王国の分割、オットー大帝の領土拡張をへて神聖ローマ帝国領邦へと至ったことを学びました。

ドイツはヒスパニア（スペイン）、ガリア（フランス）イタリアと違って、「ドイツ」としての明確な地域区分が見られませんでした。が、複雑な過程を繰り返して現代へとつながります。

今回は近代のドイツ連邦（プロイセンなど）やワイマール共和国（ナチスなど）も調べたいです。

#### <参考文献>

1. 「世界史年表・地図」 吉川弘文館 編者 亀井高孝,三上次男,林健太郎,堀米庸三  
1995 第一版 2020 第二十六版
2. 『ヨーロッパ史入門 原型から近代への胎動』 岩波ジュニア新書 池上俊一  
2021 初版
3. Wikipedia 検索「ケルト人」、「ゲルマン人」、「カール大帝」

## 日露戦争から軍縮条約期における日本海軍の戦争計画

79 回生 田中孝和

### ・はじめに

もともとは日本の帝国国防方針とアメリカのオレンジ計画に触れながら両国の戦略について書く予定だったのですが物資不足（紙面及び時間）によって限られた期間の日本海軍の戦略だけとなってしまいました。拙い文章ですが読んで頂けると幸いです。

クリミア戦争の敗北やベルリン会議での列強の圧力によってヨーロッパでの直接的な南下政策の行き詰まりを感じたロシア帝国は 19 世紀後半、東アジア進出を積極化させた。その為、明治期日本の最大の仮想敵国はロシアであった。

また当時清を含む世界中に利権を持ち、日本でも経済的影響力を保持していたイギリスはロシアが東アジアや中央アジアに進出していくにつれ、ロシアと直接的な戦争はしないものの、各地で対立を深めていた。（グレートゲーム、当時の冷戦のようなもの）

結果対ロシアで一致した両国は 1902 年 1 月末に日英同盟を締結した。この時締結された第一次日英同盟協約の内容としては一方が単独国の侵略を受けた場合、同盟国は中立を守り、二か国以上との交戦に陥った場合には同盟国は参戦することを義務付けたものである。これは当時ロシア帝国とフランスが同盟を組んでいたことから東アジアでの戦争が欧州での戦争の原因とならないようにするためである。（国防をロシア帝国に依存していたモンテネグロが日本に宣戦布告し、満州に少数の義勇兵を派遣したが、戦闘には参加しなかったため気付かなかった無視された。モンテネグロは講和会議にすら呼ばれず、その後国家が消滅したため、日本は国際法上モンテネグロが再度独立する 2006 年まで存在しない国家と戦争をしていた。このことについて国会で質問主意書が提出されたが宣戦布告の証拠が発見できないため、外務省からはとくに休戦、終戦についての情報は出されていない。）

だが日露戦争で日本が優勢になるとイギリスでは日英同盟拡大を求める声が大きくなり日露戦争終結のおよそ一ヶ月前に適用範囲を拡大し、防衛だけでなく攻撃にも参戦を行う攻守同盟である第二次日英同盟が締結された。

これを受けて、英露戦争が勃発した際どう対処すべきかを検討したことを始めとして、日本の国防戦略である帝国国防方針は考えられ、最終的に日露戦争の終結を受け

て仮想敵国を露米独仏として策定された。

ロシア帝国の太平洋艦隊は日露戦争によって壊滅していたため、日本海軍の主敵は米太平洋艦隊となった。米艦隊に対抗するため、日本海軍は巡洋戦艦八隻、戦艦八隻を中核とする八八艦隊を計画した。だが、日露戦争後に登場した弩級戦艦によって建艦予算が大きく増加したため、巡洋戦艦の数を減らし八四艦隊計画として議会に提出したが反対に遭い成立しなかった。

だが、第一次世界大戦でドイツ帝国がUボートによる通商破壊を開始すると、自国の海軍力に不安を覚えたアメリカはダニエルズ・プランを議会に提出し、157隻もの建艦計画を成立させた。これを受けて日本海軍は再度八四艦隊計画を提出、大戦景気による財政の余裕もあり議会を通過した。その後海軍は八六艦隊計画、そして1920年に八八艦隊計画の予算を通過させた。だが八八艦隊が完成した場合、維持費のみで国家予算の四割を使用するというものであり、到底完成させられるものでは無かった。

## 列強間の建艦競争



＜イギリスを超えて世界一の国になるぞ！



＜海軍国家としてドイツの2倍の海軍を維持するぞ！



＜海上貿易を守るため海軍をふやすぞ！



＜太平洋でアメリカに負けない海軍作るぞ！

第一次世界大戦が終結しても、戦勝国は建艦競争を続け、国家予算が圧迫され続けたため、アメリカ合衆国大統領ウォレン・ハーディングの提案によりワシントン会議が開催され、ワシントン海軍軍縮条約が締結された。

ワシントン海軍軍縮条約によって八八艦隊計画は頓挫し、主力艦の保有比率は対米六割となった。そのため、従来の米艦隊と直接対決を行い勝利するという計画が破綻し、新たな作戦の立案を余儀なくされた。

ワシントン海軍軍縮条約では主力艦の保有比率は制限されたが、補助艦の保有比率は制限されなかったため、日本海軍は強力な補助艦を多数建造し、艦隊決戦の前に米主力艦隊を損耗させるという漸減邀撃作戦を立案した。だが、当然他国も条約制限ギリギリの補助艦を大量建造するので建艦競争は収まらず、1927年にはジュネーヴ海軍

軍縮会議が開催されたが、英米の対立により決裂。そして英米の予備交渉の後 1930 年にロンドン海軍軍縮会議が開催され、補助艦の区分分けと保有制限が行われた。

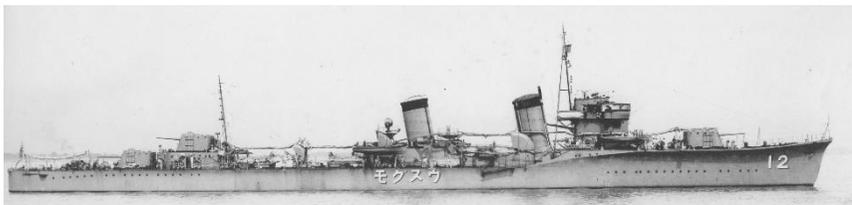
#### ロンドン海軍軍縮条約の主な内容

- 戦艦の建造中止期間の延長（5年）、既存戦艦の削減
- 1万トン以下の空母の保有制限
- 巡洋艦の区分分け  
(軽巡洋艦：排水量1850～10000t 砲の口径5.1inch～6.1inch  
重巡洋艦：排水量1850～10000t 砲の口径6.1inch～8.0inch)
- 駆逐艦の定義（排水量600～1850t 砲の口径5.1inch以下）
- 潜水艦の定義（基本的には排水量2000t以下 砲の口径5.1inch以下）
- 各艦種の保有比率の設定

条約の内容をみて勘の良い方は気づいただろう。ロンドン海軍軍縮条約には排水量と口径の制限はあるが砲門数の制限がないのだ。このため各国はできるだけ少ない排水量の艦に重武装を施そうと工夫し復元性、居住性、耐久性などに問題のある艦が多数登場した。例を挙げると、日本の重巡洋艦「足柄」はジョージ6世の戴冠式でイギリス人記者に「今日私は初めて軍艦を見た。今まで私が見てきたのは客船だった」と評されたと言われている。また制限のない600t以下で駆逐艦の役割を持たせようと重武装を施した千鳥型水雷艇は見るからにトップヘビーで1934年、3番艦の「友鶴」が転覆事故を起こし、多くの艦が武装を一部撤去するなど復元性を上昇させる改修を施された。にもかかわらず翌年行われた海軍大演習で波浪により参加艦艇の半数近くが損傷を受け、軍縮条約下で武装を過剰に搭載した艦のほぼ全てに対策を施すことになった。



睦月型駆逐艦  
「菊月」



吹雪型駆逐艦  
「薄雲」



千鳥型水雷艇  
「友鶴」

また艦艇の重武装化の他に戦時に空母に改装可能な客船や潜水母艦の建造、陸上航空兵力の増強が行われ、潜水艦や水雷戦隊だけでなく、陸上航空機によって米艦隊への攻撃を行い、漸減邀撃作戦に必要な補助戦力を補おうとしたが足りず、1934年末、日本はワシントン海軍軍縮条約の破棄を通告し、第二次ロンドン海軍軍縮会議も脱退した。

## 「黒田官兵衛はなぜ天下を取れなかったのか？」

81回生 前田瑛介

※文中の「天下」は「全国」という意味にさせていただきます。

### 1. はじめに

黒田官兵衛は秀吉の軍師としてのイメージが強く1582年の備中高松城の戦いで水攻めに代表されるように戦いの場で優れているだけではなく1578年に備前の宇喜多氏を調略で味方に引き込んだり1590年の小田原攻めでは北条氏に講和勧誘を行うなど外交面においても優れていました。このように十分に天下をとる実力はあったように思われますが、なぜ天下をとれなかったのか（天下を取るチャンスがなかったのか）考えていきたいと思えます。

### 2. 生い立ち

官兵衛は天文15年（1546年）に播磨の小大名であった小寺政職の家老であった小寺職隆の家に嫡男として生まれました。家老の嫡男であったのでいわゆる「若殿」として育てられたわけですが足軽としてスタートした豊臣秀吉に比べればましであったかもしれませんが、曲がりなりにも独立勢力であった織田信長や徳川家康などと比べればずいぶん不利なスタートであったに違いないでしょう。1567年に官兵衛は家督を継いで小寺家の家老になりましたがこの年は信長が美濃の齋藤氏を滅ぼした年であり、信長を中心として時代が変わりつつあるなか官兵衛は弱小大名の家臣として主君を支えなければならなかったのです。その後官兵衛は小寺家の安泰のために主家に代わって信長に嫡男の松寿丸（のちの長政）を差し出したリ、中国へ侵攻する秀吉のために姫路城を提供するなどすべて自分の野望のためではなく小寺家のために努力を尽くしました。そういう意味でも官兵衛はほかの戦国大名と比べてスタートが遅かったように思われます。

### 3. 秀吉に警戒された

秀吉との出会いから官兵衛が世の中に知れ渡ったというのも事実ではありますが一つ有名なエピソードがあります。天下人となった秀吉が近臣たちに「自分が死んだ

後に天下を取るのは誰だ」と聞いたところ多くの大大名の名前が挙がる中、秀吉は官兵衛だと答えたといわれています。当時官兵衛は豊前の中津を拠点とする僅か12万石ほどの大名であったにもかかわらず秀吉が官兵衛だと答えたのはおそらく秀吉は官兵衛を恐れており、官兵衛に大禄を与えてしまったら本当に天下を取ってしまうだろうと恐れていたのでしょう。このことも官兵衛が天下を取ることができなかった理由の一つだと見受けられます。

#### 4. 生涯でたった一度のチャンス～九州の関ヶ原～

##### ① 戦いの経過

1598年に秀吉が死去すると天下は新たに自らの政権を打ち立てようとする徳川家康と豊臣政権の継続を望む石田三成の間で激しい対立が起きました。そうして1600年7月15日、家康が会津の上杉氏討伐のために大阪を出陣している間に三成は挙兵しました。この三成挙兵の情報を官兵衛が得たのは挙兵からわずか3日後だといわれています。当時はすでに家督を子の長政に譲っており、すでに隠居のみでありましたがこの日が来るのを予想し瀬戸内に早舟を数か所に置いていたとされます。官兵衛は秀吉の死後天下を取るのは家康だと考えていました。が、万が一のことも考えていました。豊臣方の大名の力も侮れないので戦乱は続くであろうと考えていました。そしてその間にいち早く九州を平定しその勢いのまま中国を平定して東上して勝者と戦えば天下を取るチャンスが訪れるかもしれないと考えました。当時官兵衛の息子である長政が家康の会津攻めに従っていたので官兵衛はほとんど家来が領国内にいませんでした。そのため官兵衛がまず行ったのは募兵でした。中津城の蔵を開け放ち金銀財宝を大放出して人を集めました。しかも前金であったので浪人から百姓まで瞬く間に8000人ほど集まりました。こうして1600年9月9日に出陣して豊後に出撃しました。そこで大友宗麟の嫡男である大友義統を倒す（石垣原の戦い）など破竹の快進撃を見せますが9月15日に関ヶ原の戦いで家康が勝利しその一戦を持って天下が決まってしまいました。天下統一の野望が潰えたことを知った官兵衛は初めから家康に与同していたかのように振る舞いました。その後柳川城に籠る立川宗茂を調略で味方に引き入れたり（詳しいことは下図参照）

して薩摩の島津氏を倒すために軍を水俣にまで進めましたが1600年11月12日に家康から停戦命令が届き軍を解散しました。



(濃色付きが家康方、城が三成方、薄色が中立、如水は官兵衛の隠居後の号)

## ② 戦後

官兵衛が九州を席卷している間、この長政は家康に従い、関ヶ原の戦いでは三成方随一の勇将である嶋清興を討ち取ったり、西軍の小早川秀秋などの寝返り工作など行い、家康から関ヶ原の戦い一番の功労者として筑前52万石のを与えられました。(この時長政が「家康殿は『我が徳川家の子孫の末まで黒田家に対して疎略あるまじ』と3度右手を取り感謝した」という長政の報告に対し、「その時、お前の左手は何をしていた？(家康の首を取れる絶好の機会にお前は何をしていた)」というエピソードはここでの場面です。このエピソードから官兵衛は本当に天下を狙っていたと考えられます。) また、井伊直政や藤堂高虎の勧めもあり、家康は官兵衛に領地の加増を提示しますが官兵衛は断ったとされています。その後の官兵衛は戦いに出ることはなく1604年に生涯を閉じました。

## 5. 結論

官兵衛が天下を取ることができなかったのにはこのように様々な理由があるとされていますが結局「運」がなかったからのように思われます。なのでもし官兵衛に運があれば時代はもっと変わっていたのかもしれませんが。ここまで拙い文章を読んでいただきありがとうございました。

## 6. 参考文献

「黒田官兵衛 鮮烈な人生」 2013年 歴史探訪シリーズ 晋遊舎ムック  
「関ヶ原合戦全史 1582-1615」 2021年 渡邊大門 草思社  
戦国のすべて <https://sgns.jp/>